

大宰府条坊跡

第165次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

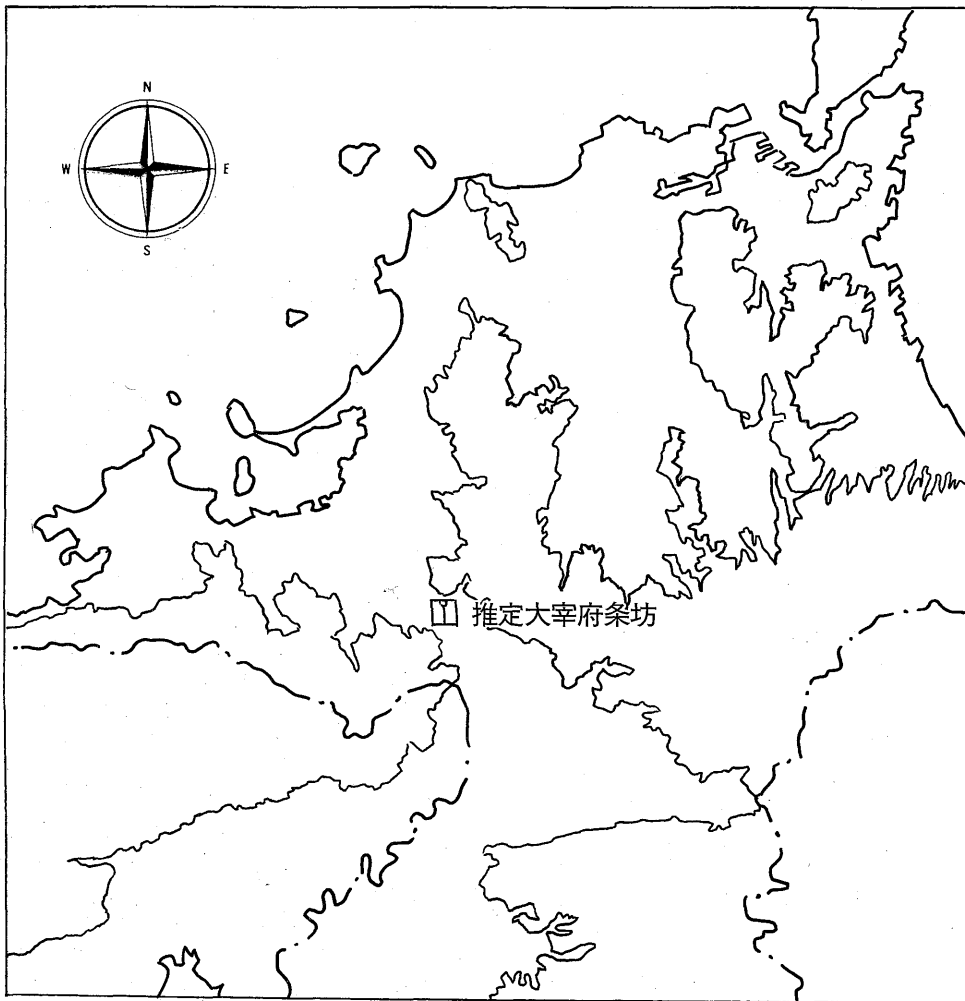
第64集

2001

筑紫野市教育委員会

大宰府条坊跡

第165次発掘調査



例 言

1. 本書は店舗建築に伴い筑紫野市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は筑紫野市教育委員会が、(株)太陽家具百貨店より委託を受けて実施した。
3. 調査対象地は1次調査が筑紫野市大字塔原625-1、625-3、625-4、626-4、627-4、628-1、628-2、628-5、629-1、629-3の6,251m²、2次調査が629-3、629-7の887m²である。
4. 現地での調査にかかる実測および写真撮影は藤尾薫、奥村俊久が行った。
5. 出土遺物の実測は奥村と福田京子（㈸埋蔵文化財サポートシステム）が行った。
6. 製図は藤村佳久恵（㈸文化財テクノアシスト）が行った。
7. 出土遺物の写真撮影は岡紀久雄（フォトハウス Oka）が行った。
8. 発掘時の遺構番号は遺構単体で完結すると考えられる遺構には、頭にSを冠し1から通し番号を付け、単体で完結しないと考えられるピット等の遺構は頭にPを冠し番号を付した。遺物のナンバーリングもこの番号で行った。
9. 報告に当たっては遺構の性格付けを行い、竪穴式住居跡をS I、墳墓をS T、土壇をS K、溝をS Dの略号を与え、その後に現場で付した番号をそのまま付した。ピット等についてはそのまま用いた。
10. 本書の執筆、編集は奥村が行った。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	位置と環境	2
III	調査の内容	5
	1. 住居跡	5
	2. 古 墳	10
	3. 墳 墓	14
	4. 土 壙	15
	5. 溝	19
	6. 不明遺構	25
	7. ピットの調査	25
	8. その他の出土遺物	26
IV	まとめ	28
	1. 住居跡について	28
	2. 古墳について	29
	3. 墳墓について	29
	4. 土壙について	29
	5. 溝について	29
	6. 脇田古墳群について	30

挿 図 目 次

第1図	調査地点周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000）	3
第2図	調査地点周辺地形図（縮尺 1/5,000）	4
第3図	S I 0 0 9 出土鉄器実測図（縮尺 2/3）	5
第4図	S I 0 1 0 ・カマド実測図（縮尺 1/40・1/30）	6
第5図	S I 0 1 0 出土ガラス玉実測図（縮尺 1/1）	6
第6図	S I 0 1 3 実測図（縮尺 1/40）	7
第7図	S I 0 1 3 出土土器実測図（縮尺 1/4）	8
第8図	S I 0 1 3 出土土器実測図（縮尺 1/3）	9
第9図	S I 0 1 3 出土石器実測図（縮尺 1/3）	10
第10図	S I 0 1 3 出土石器実測図（縮尺 1/2）	10
第11図	脇田B3号墳平面図（縮尺 1/200）	11
第12図	脇田B3号墳石室実測図（縮尺 1/60）	12
第13図	脇田B3号墳周溝断面図（縮尺 1/30）	12
第14図	脇田B3号墳出土土器実測図（縮尺 1/3）	13

第15図	脇田B3号墳出土鉄器実測図（縮尺 2/3）	14
第16図	脇田B3号墳出土鉄器実測図（縮尺 2/3）	14
第17図	ST実測図（縮尺 1/30）	15
第18図	ST001出土鉄器実測図（縮尺 1/2）	15
第19図	ST006出土土器実測図（縮尺 1/3）	15
第20図	SK実測図①（縮尺 1/40）	16
第21図	SK実測図②（縮尺 1/40）	17
第22図	SK出土土器実測図（縮尺 1/3）	18
第23図	SD011・012土層断面図（縮尺 1/30）	19
第24図	SD017土層断面図（縮尺 1/60）	19
第25図	SD017出土土器実測図（縮尺 1/3）	21
第26図	SD017出土土器実測図（縮尺 1/4・1/3）	22
第27図	SD017出土土器実測図（縮尺 1/4・1/3）	23
第28図	SD017出土陶器実測図（縮尺 1/2）	24
第29図	SD017出土鉄器実測図（縮尺 1/3）	24
第30図	SD017出土金環実測図（縮尺 2/3）	24
第31図	SD021断面図（縮尺 1/30）	25
第32図	SD021出土石器実測図（縮尺 2/3）	25
第33図	SX022実測図・出土鉄器実測図（縮尺 1/20・1/2）	25
第34図	P085実測図（縮尺 1/20）	26
第35図	ピット出土土器実測図（縮尺 1/3）	26
第36図	P090出土瓦実測図（縮尺 1/4）	26
第37図	整地面出土土器・石器実測図（縮尺 1/4）	27
第38図	その他の出土遺物 土器実測図（縮尺 1/3）	27
第39図	その他の出土遺物 石器実測図（縮尺 1/2）	28
第40図	その他の出土遺物 勾玉実測図（縮尺 1/2）	28
第41図	筑紫地区古墳分布図	34
第42図	脇田古墳群周辺古墳等位置図（縮尺 1/3,000）	36

付 図

大宰府条坊跡第123・165次発掘調査遺構配置図（縮尺 1/200）	1 葉
------------------------------------	-----

I 調査に至る経過

平成6年10月25日に、株式会社太陽家具百貨店から願出された筑紫野市大字塔原624番地外、14,417.69㎡の開発に伴う県開発許可申請事前審査会が開催された。筑紫野市教育委員会では開発予定地が周知の遺跡（大宰府跡）の範囲内であり、北側隣接地を平成4年に発掘調査を実施しており、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いことから、確認調査をはじめとした文化財保護にかかる手続きを指示した。平成7年1月13日付けで㈱太陽家具百貨店から市教育委員会に文化財の有無について照会がなされた。これを受け確認調査を実施した結果、北側の約6,200㎡に埋蔵文化財が確認された。同年2月7日付けで埋蔵文化財発掘の届出が市教育委員会に提出され、市は直ちに県教育委員会に進達した。2月23日付けで市都市計画課から市教育委員会に県開発本申請に伴う協議が行われ、市教育委員会は埋蔵文化財発掘の届出に対する指示に従うよう指導した。3月10日付けで県教育委員会から㈱太陽家具百貨店に工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があった。この指示を受け、筑紫野市教育委員会は㈱太陽家具百貨店から委託を受け、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとし、契約締結の後、発掘調査に着手した。

この開発行為の隣接地981.86㎡について、同開発の追加のため平成8年11月25日に農地転用申請に基づく事前協議申請、12月20日に県開発の変更申請に伴う協議の申請があり、当該地も周知の遺跡内にあり、発掘調査を実施した遺構が続いていると考えられるので、文化財保護法に係る手続きを行うよう指導した。平成8年12月25日、変更により追加された箇所の埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成9年1月27日付けで発掘調査を実施するよう県教育委員会から指示があった。筑紫野市教育委員会では先に提出された事業と同一の開発であることから2次調査として、㈱太陽家具百貨店と委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

発掘調査期間

1次調査 平成7年3月23日から平成7年5月26日まで

2次調査 平成9年1月11日から平成9年1月17日まで

調査組織

庶務	筑紫野市教育委員会	教育長		永渕	正敏
		教育部 部長		永田	晋一
		教育部	社会教育課 課長	岡部	隆充
			社会教育課 文化財担当係長	森実	秀美
			文化財担当技師	草場	啓一
発掘調査	筑紫野市教育委員会	教育部	社会教育課 文化財担当主事	奥村	俊久
			文化財担当技師	藤尾	薫
			(1次・2次調査)		
			文化財担当主事	奥村	俊久
			(1次調査)		

II 位置と環境

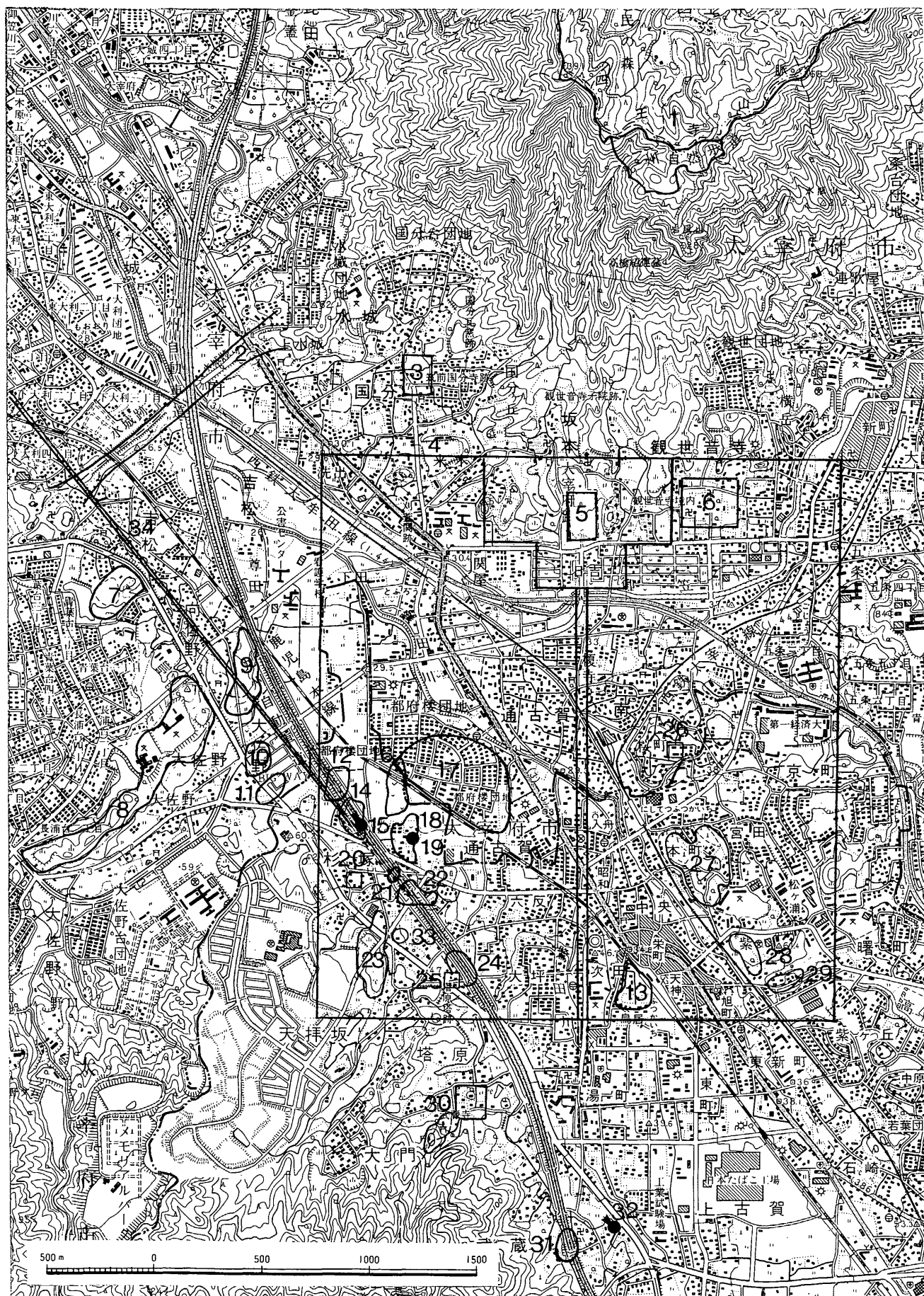
筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中間に位置する。市の東西から三群山塊、脊振山塊が迫り、その間に狭長な平野部を有す。この平野部は福岡平野と筑紫平野を潤す河川の分水嶺となっている。市の北部は大宰府市と境を接し、推定大宰府条坊の南側半分は当市の市域に入る。^{註1}また、市の南部は、佐賀県基山町との境となる基山に基肆城があり、御笠地区遺跡A地点では万葉集に詠われた蘆城駅家と想定される遺構も発見されている。^{註2}大宰府条坊跡第99次調査では大宰府西門ルートと呼ばれる官道が、岡田地区遺跡群からは大宰府から豊後方面へ向かうと考えられる官道が発見され、^{註3}このように筑紫野市内からの大宰府関連遺構の発見も少なくない。^{註4}

大宰府条坊跡第165次発掘調査地点は推定大宰府条坊右郭21条9坊に位置し、脊振山塊の東端に位置する天拝山から北に延びる尾根の裾に位置する。裾部は大きく開析され、また後世に削平を受け、数本の台地が延びる景観を呈し、その中に独立した小山がある。

本調査地点は天拝山に最も近い標高62.7mの小山から北東に延びる削平された低丘陵上に位置する。北側隣接地は平成4年に発掘調査を実施し、弥生時代と推測される竪穴式住居跡1軒、5世紀初頭と考えられる竪穴式住居跡1軒、横穴式石室を内部主体とする古墳2基、および9世紀中頃から10世紀前半頃までの墳墓が検出されている。^{註5}本調査地点がある低丘陵と小さな谷部を挟んだ北側は脇田遺跡A地区、先の小山は同B地区としている。A地区は昭和57年に建築工事に伴い発掘調査を実施しており、4世紀後半から5世紀前半の竪穴式住居跡7軒と横穴式石室を内部主体とする円墳1基を検出した。^{註6}またB地区は昭和60年に土取造成工事に伴い、昭和63年に都市計画道路建設に伴い発掘調査を実施した。^{註8}弥生時代中～後期の竪穴式住居跡や貯蔵穴を主体とし、弥生時代中期や古墳時代前期の土壙、12世紀前半の墳墓等が検出されている。^{註7}北側300mには杉塚廃寺、^{註9}南側300mには塔原廃寺と^{註10}いった寺院址があるほか、東側を通る九州縦貫自動車道建設にあたって、^{註11}剣塚遺跡、^{註12}唐人塚遺跡、^{註13}桶田山遺跡、^{註14}塔原遺跡など弥生時代から近世に至るまでの遺跡が調査されている。

註

註1	「大宰府都城の研究」鏡山猛	1928	
註2	「御笠地区遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第15集	1986	筑紫野市教育委員会
註3	「大宰府条坊跡第99次発掘調査」筑紫野市文化財調査報告書第52集	1997	筑紫野市教育委員会
註4	「岡田地区遺跡群Ⅱ」筑紫野市文化財調査報告書第56集	1998	筑紫野市教育委員会
註5	「大宰府条坊跡第123次発掘調査」筑紫野市文化財調査報告書第59集	1999	筑紫野市教育委員会
註6	「脇田遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第9集	1984	筑紫野市教育委員会
註7	「脇田遺跡Ⅱ」筑紫野市文化財調査報告書第13集	1986	筑紫野市教育委員会
註8	「脇田遺跡Ⅲ」筑紫野市文化財調査報告書第43集	1994	筑紫野市教育委員会
註9	「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」 「杉塚廃寺」筑紫野市文化財調査報告書第4集	1974	福岡県教育委員会
註10	「塔原廃寺」福岡県文化財調査報告書第35集	1979	筑紫野市教育委員会
註11	「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIV」	1967	福岡県教育委員会
註12	「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVIII」	1978	福岡県教育委員会
註13	「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ」	1978	福岡県教育委員会
註14	「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」	1975	福岡県教育委員会
		1978	福岡県教育委員会



第1図 調査地点周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

1. 大野城跡 2. 水城跡 3. 筑前国分寺跡 4. 大宰府跡 5. 大宰府政庁跡 6. 観世音寺 7. 篠振遺跡
8. 宮ノ本遺跡 9. 前田遺跡 10. フケ遺跡 11. 尾崎遺跡 12. 井ノ尻遺跡 13. 堀池遺跡 14. 剣塚遺跡
15. 剣塚1号墳 16. 大坪遺跡 17. 市ノ上遺跡 18. 大門遺跡 19. 埴安神社古墳 20. 杉塚廃寺 21. 前田遺跡
22. 唐人塚遺跡 23. 脇田遺跡 24. 塔原遺跡 25. 塔原廃寺 26. 般若寺跡 27. 峯畑遺跡 28. 通り浦遺跡
29. 五穀神遺跡 30. 武蔵寺跡 31. 八隈古墳群 32. 原古墳 33. 脇田古墳群 34. 水城西門ルート官道

III 調査の内容

1. 住居跡

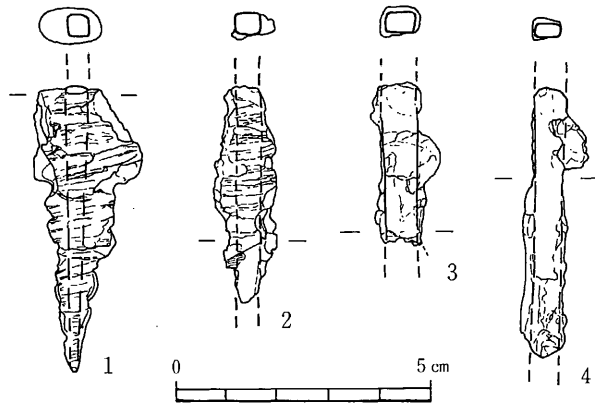
(1) S I 0 0 9

竪穴式住居跡の痕跡であり、床等は既に失っている。平面プラン等は確認できなかった。

出土遺物

鉄釘片が7点と土師器の坏・甕の小片が出土したのみである。1～4は鉄釘で、比較的残りが良いものである。1は先端部で、釘に直行した目をもつ木質が付着する。2も直行する目の木質が付着する。3は木質の付着は認められなかったが、4は平行した目の木質が付着していた。

この鉄釘は住居跡に伴うものとは考えにくく、この遺構上に墳墓等があったのかもしれない。



第3図 S I 0 0 9出土鉄器実測図(縮尺 2/3)

(2) S I 0 1 0

一辺2.9～2.4mを測る方形プランを呈す竪穴式住居跡である。西側の壁長がやや短く、壁高は10～15cm程が残る。北壁の中心よりやや東側にカマドが設けられる。壁体から袖が約90cm延び、煙出し部分の壁体は僅かに奥に掘り込まれる。カマドの周りは1～数cm掘り下げられており、さらに焚口は円形に掘り込まれる。南側両隅にあるピットは深さ10cm余りで、この住居跡に伴う明確な支柱穴は確認できなかった。また、床面下8～10cmの位置で、この住居跡の掘方を確認した。

出土遺物

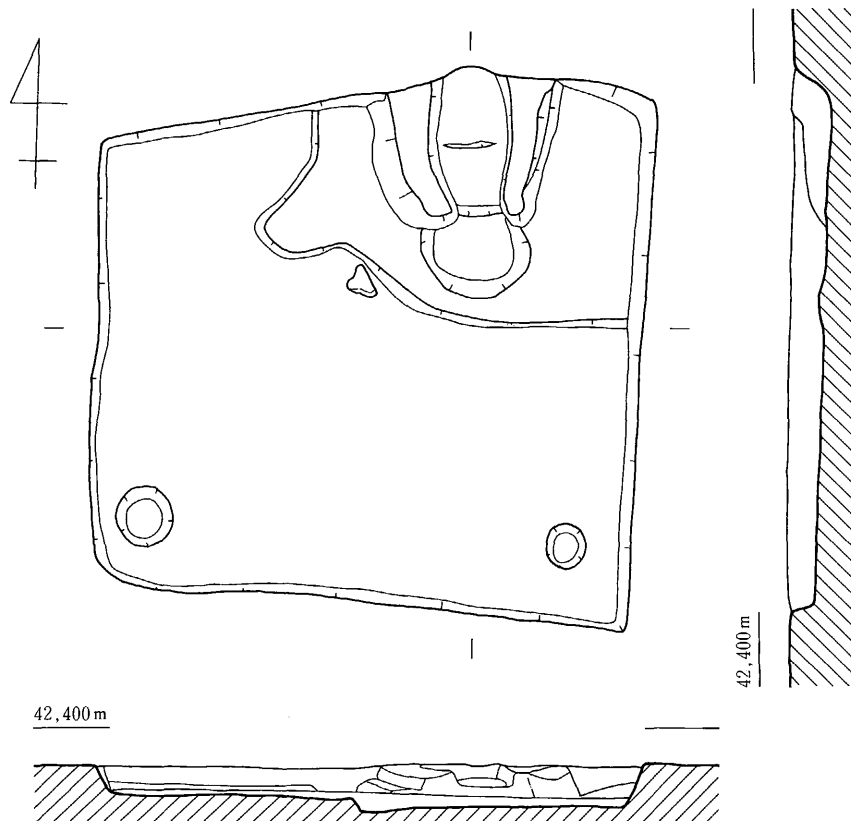
5はガラス製の小玉で、直径3.7mm、厚み1.6mmを測り、色調は淡青色を呈す。中央の穴は径1.25mmである。

(3) S I 0 1 3

調査区の東で確認された方形プランの竪穴式住居跡である。北側壁は2.7mを測るが、住居跡の東側は削平により既に失われ、西側壁の残存長4.1mを測る。壁高は約35cmを測り、比較的残りがよい。また、北東隅からは甕(6)と壺(12)が床面より出土した。

出土遺物

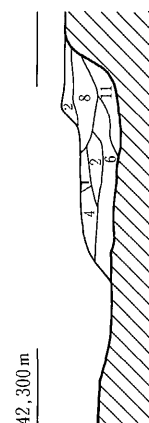
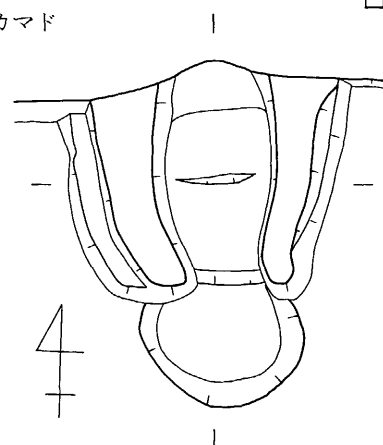
出土遺物はすべて土師器である。6～11は甕である。6は12とともに床面から出土し、胴部の一部を欠失する。比較的長い口縁部はやや外傾して立ち、全体に丸みをもつ胴部は中央のやや高い位置に最大径をもつ。胴部は煤の付着が認められ、下半は赤変し、表面が大きく弾け飛ぶ。このため、底部付近の形態は不明瞭であるが、内面の形状などから、緩やかな丸みを持つ底部になると思われる。外面調整は口縁部より順に刷毛目が斜方向に施され、胴部最大径位は



42,400 m



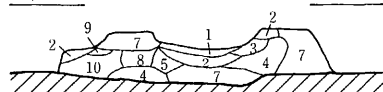
カマド



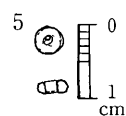
カマド断面図観察表

1. 暗褐色褐色焼土
(赤褐色土ブロックをやや混入する)
2. 暗褐色土
3. 赤褐色焼土
4. にぶい黄褐色土
(赤褐色土が僅かに混入する)
5. にぶい黄褐色土
(赤褐色土が僅かに混入する)
6. 褐色土
(赤褐色土が混じる)
7. 暗褐色粘土
8. 褐色粘土
9. 明黄褐色粘質土
10. 灰黄褐色土
11. 褐色土

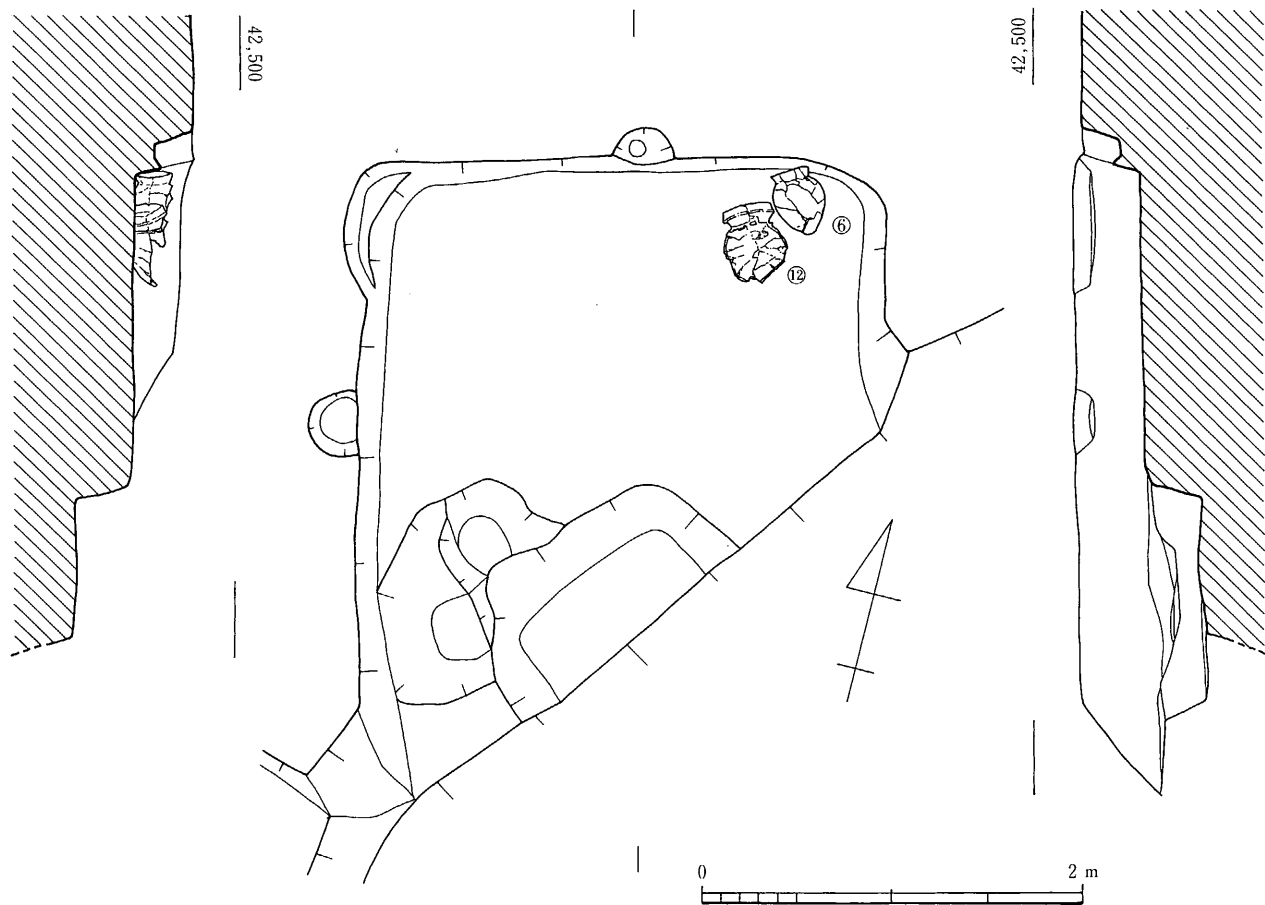
42,300 m



第4図 S I O 1 0 ・カマド実測図 (縮尺 1/40・1/30)

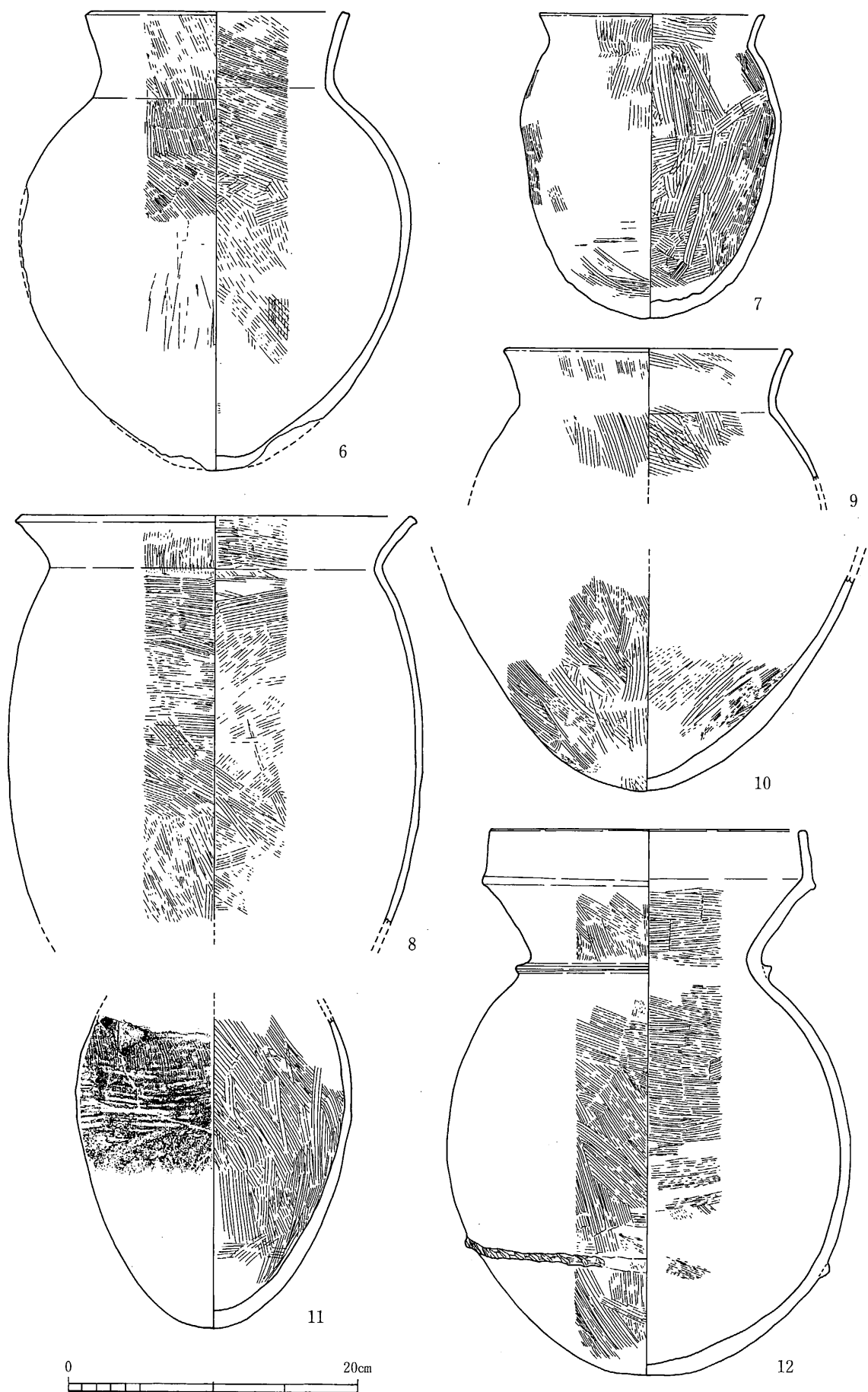


第5図 S I O 1 0 出土ガラス玉実測図 (縮尺 1/1)

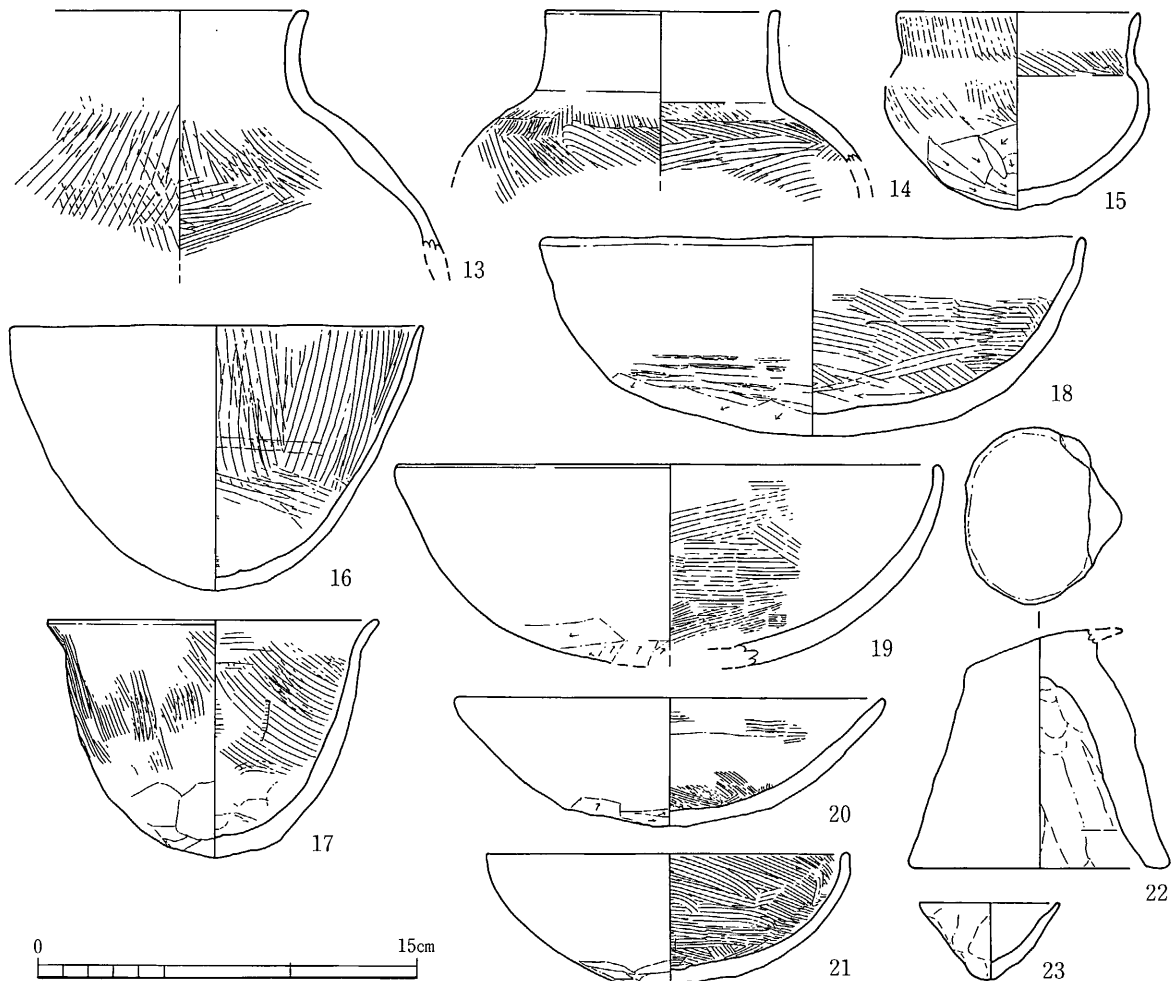


第6図 SI 013実測図 (縮尺 1/40)

その角度が深い。胴部下半は縦方向にいわゆる板ナデを施し、その後、最大径位に短い単位で横方向の板ナデを廻す。内面は口縁部から胴部にかけて刷毛目が施されるが、胴部最大径位より上は角度が浅く、下は深い。底部は指頭痕が残り、径4 cm程の平坦面を作る。7は口縁部から胴部までの部位は残存するものの、全体的には3/4程度を失う。口縁部は短く僅かに外傾する。最大径は胴部中位のやや高い位置にもつが、張りは弱く、緩やかに丸底を呈す底部に至る。胴部下半部には僅かにタタキの痕跡が認められる。外面調整は口縁部から胴部にかけて縦方向の刷毛目が、底部付近は斜方向の刷毛目が施される。内面調整も基本的に刷毛目で仕上げられるが、口縁部は横方向、胴部は最大径位より上が縦方向に近い斜方向、下が横方向に施した後、綾杉状を意識した刷毛目が施されている。8は甕上半部1/5程度の破片である。口縁部は胴部から「く」字状に折れ、外傾して立つ。口唇部は平坦に仕上げられる。胴部は中位に最大径を持ち、緩やかな弧を描く長胴形を呈すと思われる。外面調整は胴部上半に横方向の刷毛目を施した後、口縁部と胴部下半に縦方向の刷毛目を施す。内面調整は口縁部から胴部上位にかけて横方向、胴部中位以下は浅い斜方向の刷毛目が施されるが、胴部下半は器面が磨耗し不明瞭となっている。9は口縁部の小片で、口径の1/4程度が残る。胴部から「く」字状に折れ、浅く外傾して立ち、口唇部は平坦に仕上げられる。調整は内外面とも刷毛目で仕上げられる。10は丸底の甕の底部である。内外面とも刷毛目で調整され、外面には煤の付着と赤変が僅かに認められる。11は上半部を欠失する長胴の甕である。煤の付着や赤変が認められ、器壁は荒れている。外面



第7図 SI 013出土土器実測図 (縮尺 1/4)



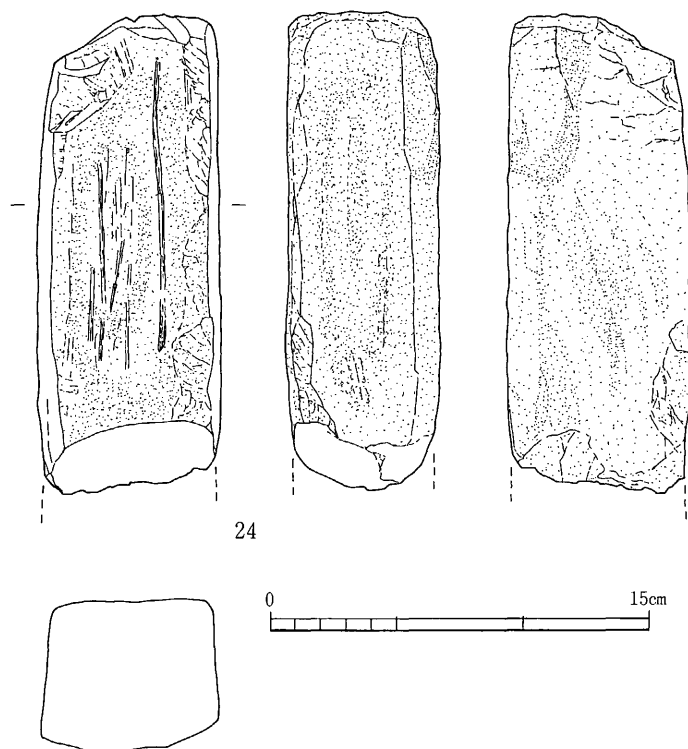
第8図 S I O 1 3 出土土器実測図 (縮尺 1/3)

はタタキの後、胴部上半を縦方向の刷毛目で調整する。胴部下半から底部にかけては不明瞭であるが、削りを施しているようである。内面は刷毛目で調整され、焦げ跡が残る。12は二重口縁壺である。胴部はやや長めの球状を呈し、頸部との境に断面三角形の凸帯と胴部下位にさらに斜めに刻み目を施した凸帯が巡る。胴部と底部との境はあまく、底部はやや平坦になる程度である。頸部は外傾して開き、その外側にごく僅かに内傾した口縁部が付けられる。調整は内外面とも、口縁部はヨコナデされ、頸部から胴部にかけて刷毛目が施される。内面底部には指頭痕が僅かに残る。13は短頸壺の小片で、埋土の上位から出土した。外面は刷毛目が施され、頸部はさらにヨコナデされる。内面の頸部は横方向、頸部下は縦方向、その下に斜方向の刷毛目が施される。14も短頸壺で、口頸部周辺の1/3が残る。内外面とも刷毛目調整され、さらに口頸部はヨコナデされる。15は小型の壺で、口縁部の3/4程度を欠失する。口縁部は短くやや外傾して立つ。胴部は上位に最大径をもち、底部は尖り気味に収まる。内外面口縁部から外面胴部上半は刷毛目が認められ、外面胴部下半はへう削りされる。内面胴部はナデで仕上げられるが、木口の痕跡が僅かに認められる。16～21は鉢で、16・17・20は上層から出土した。16・17は深鉢形、18・19は大形の碗状、20・21は碗状を呈すものである。16は外面に多量の煤が付着し、さらに磨耗により器面は不明瞭であるが、口縁下に僅かに刷毛目が認められ、以下へう削りを行っている。内面は刷毛目調整され、底部に焦げ跡が残る。17は1/3足らずの破片で、外面口縁

部から体部上半に刷毛目が認められ、体部下半から底部はへう削りされる。内面は口縁部から体部にかけて刷毛目が施され、底部は指頭痕が多く残る。口縁部はさらにヨコナデされる。18は口縁部の一部を、19は約1/2程度を欠失する。いずれも外面体部下半はタタキ痕が認められ、その上をへう削りで仕上げられる。

外面体部上半は粗いヨコナデ、内面は刷毛目で調整される。20は2/3程を欠失する。体部が開くタイプで、外面調整は上半に刷毛目が認められ、下半はへう削りされる。

21は1/2足らずを欠失する。外面は体部から底部に至るまでへう削りされ、内面は全体に刷毛目調整される。22は沓形器台でつまみの部分を欠失する。受け部は傾斜し、頂部穿孔はみられない。23は盃状を呈すミニチュア土器で、比較的丁寧な作りである。24は上層から出土した中粒の石英砂岩製の砥石である。一端を欠失するが3面を利用している。25は花崗岩製の叩石で、1/2足らずを欠失する。摺石として利用するが、一端に叩痕を残す。

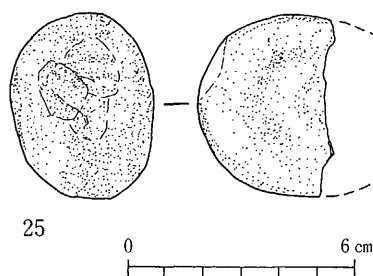


第9図 S I O 1 3 出土石器実測図 (縮尺 1/3)

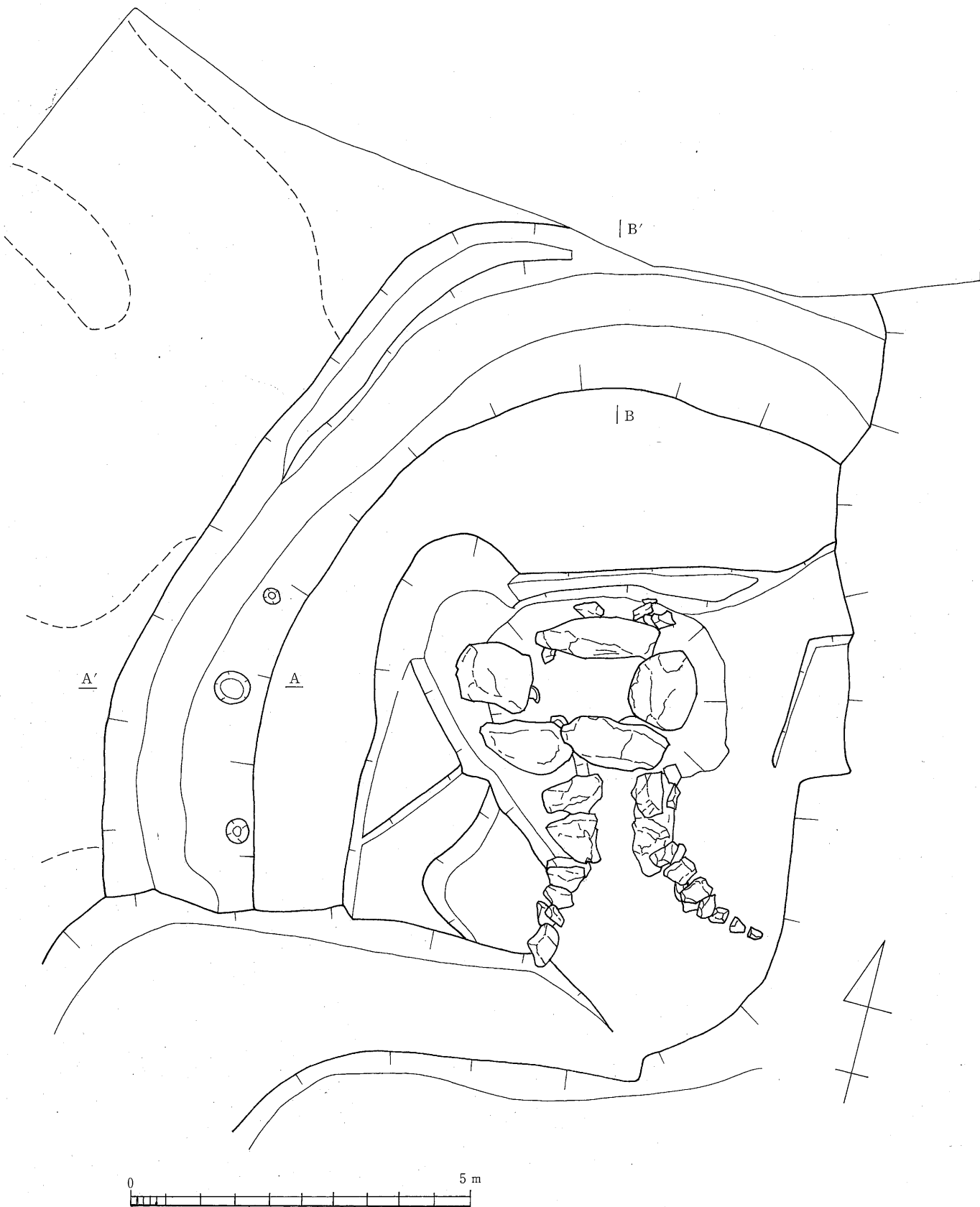
2. 古 墳

削平を受け、墳丘は失われる。石室は大破し、腰石等が残るのみである。石室の北から西側にかけて幅2m前後の周溝が認められ、石室の中央部から周溝の端まで約5.3mを測ることから、墳丘は10~11m程と推定される。石室はN-15°-Wに主軸をとる単室両袖の横穴式石室で、

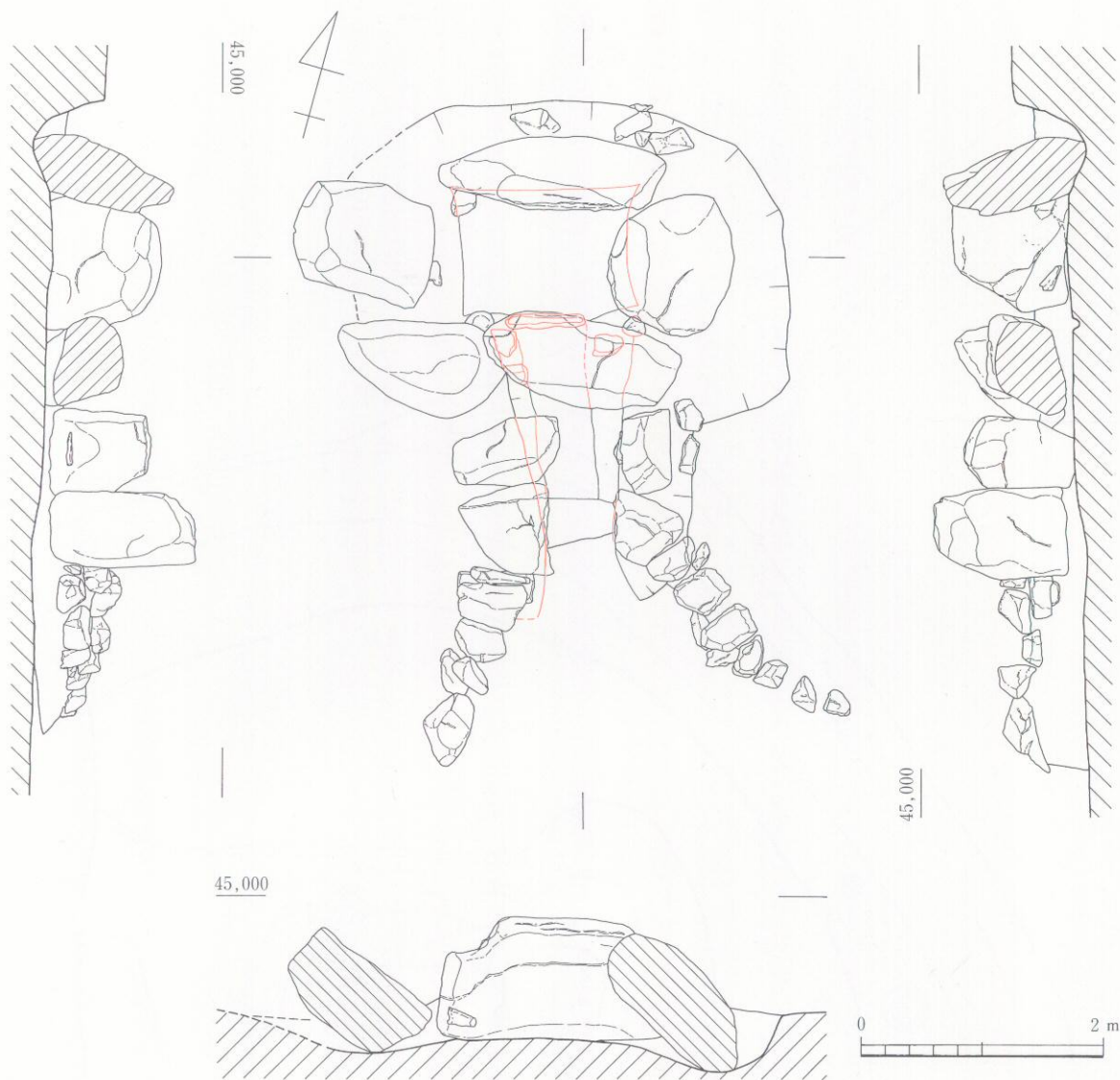
石材はすべて花崗岩で、玄室の石材は東から西にむけ倒れ、石室西側は深く攪乱を受ける。框石は既に失われ、その痕跡のみが確認された。玄室は右壁長1.25m、左壁長1.3m、奥幅1.9m、前幅1.8mと推定される。玄室中心部では長さ1.25m、幅1.7m程であろう。腰石は奥壁・側壁共に一石で構成される。奥壁は横長に据えられるが、側壁は縦長に用いる。羨道部は2.5mを測り、両壁とも袖石からさらに2石を配す。石材は縦長に置かれ、特に入口部は背の高い石材を立てる。前庭部は扇状に開き、左壁側2.1m、右壁側1.7mに外護列石が確認され、入口側は2段に積まれている。



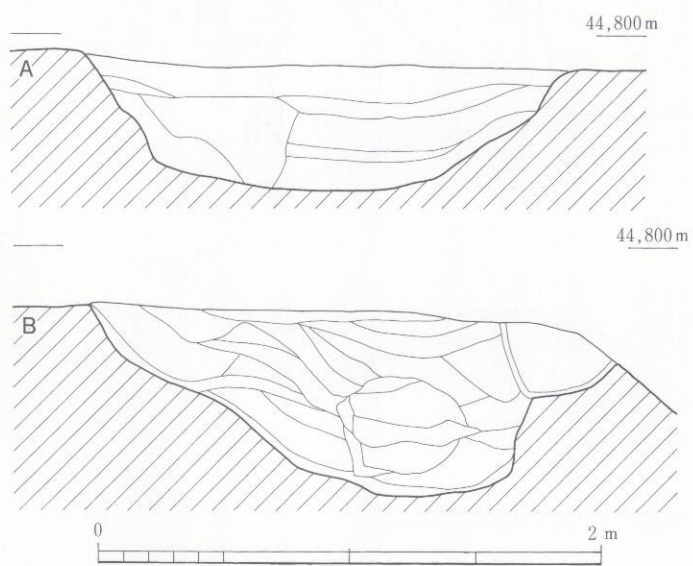
第10図 S I O 1 3 出土石器実測図 (縮尺 1/2)



第11図 脇田B 3号墳平面図（縮尺 1/80）



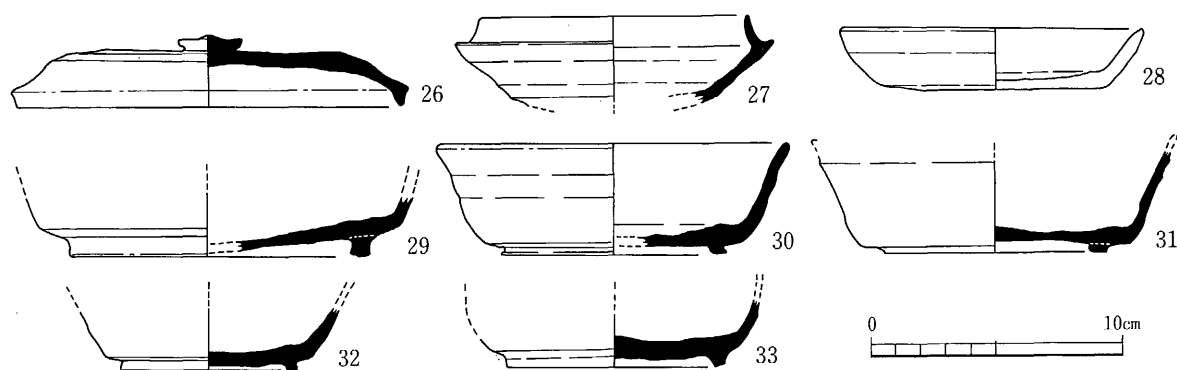
第12図 脇田B 3号墳石室実測図 (縮尺 1/60)



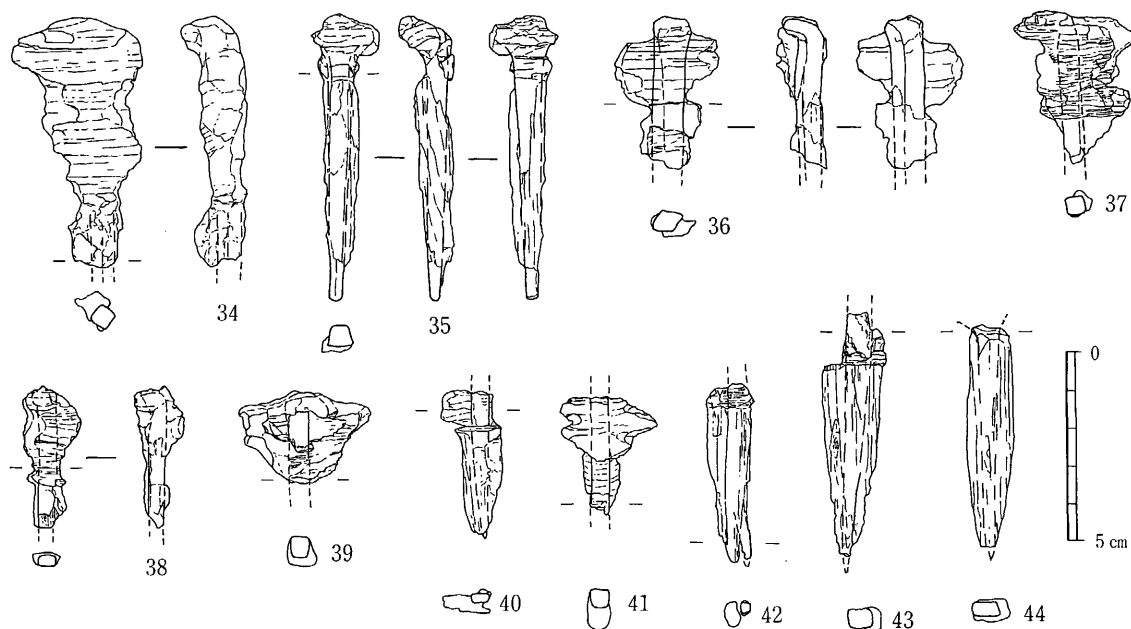
第13図 脇田B 3号墳周溝断面図 (縮尺 1/30)

出土遺物

出土遺物で床面等明確に時期を確定しえる状態で出土したものはなく、すべて埋土中からの出土である。26・27・29は前庭部から、28は石室埋土から出土した。26は口縁部の1/3を欠失する須恵器の坏蓋である。口径15.7～16cm、器高2.8cmを測る。天井は回転ヘラ削りが行われ、平坦に仕上げられる。天井部中央には擬宝珠形の撮みが貼付される。体部は短く緩やかに下り、口縁部は下方に引き出される。27は須恵器の坏身で上半部の1/3程の小片である。口径10.6cm、受部径12.6cm、立ち上がり高1.1cm、残存高3.55cmを測る。立ち上がりは内傾し、受部はやや上方に引き出される。体部下半には回転ヘラ削りが施される。28は土師器の坏で石室内の埋土より出土した。ほぼ完存しており、口径12cm、底径9cm、器高2.55cmを測る。体部は僅かな弧を描き、外傾して立ち上がる。体部の器壁は厚手であるが、底部は粘土をナデ取られ、薄く仕上げられる。底部には板状圧痕が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は精製されたものが用いられるが、1～2mm大の砂粒、雲母粒を若干含む。焼成は良好である。29は須恵器の底部で、1/4程の小片である。底径14.2cmを測り、体部と底部の境から9mm内側に断面方形の低い高台を持つ。高台径は12cmを測り、底部中央にはカキ目が残る。30～33はいずれも周溝から出土した須恵器の坏身である。30は2/3程を欠失する。口径10.8cm、器高4.5cm、底径10cm、高台径8.8cmを測る。体部はやや外傾し、口縁部付近で僅かに外反する。高さ4mm程の高台が、底部端から7mm程内側に貼付される。31は体部から底部付近の破片で、体部と底部の境はややあまい。底径10.6cm、高台径8.7cm、残存高4cmを測る。体部は直線的に外傾し、底部端から6mm程内側に高さ3mm程の高台が貼付される。高台は30・31共に押し潰れたような形状を呈す。32は底部付近の破片で、2/3程が残る。底径8cm、高台径7cm、残存高2.5cmを測り、比較的小型のものである。体部と底部の境は明瞭で、6mm内側に断面四角形の低い高台が巡る。33は底径9.8cm、高台径8.6cm、残存高2.5cmを測る。底部と体部の境は明瞭で、内側4mmに断面四角形の高台が貼付される。体部下半は緩やかな弧を描き立ち上がる。34～44は石室内から出土した鉄釘で、図示したもののほか7点の小片がある。いずれも釘に木質が付着し、釘と木質の目が平行になった板材をつなぎとめたもの(34・36～39・41)と、目が直行する板材をつなぎとめたもの(35・40・42～44)がある。45は黒曜石製の石鏃である。先端部を欠失し、幅19mm、残存長20.5mmを測る。その外に、周溝から緑釉陶器の底部細片が出土している。軟質で、淡い肌色の胎土に、釉は濃緑色を呈す。



第14図 脇田B3号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)



第16図 脇田B 3号墳出土鉄器実測図（縮尺 1/2）

3. 墳 墓

（1）ST001

主軸をN-5°-Eにとり、墓壙は12.2×7.5mの楕円形プランを呈す。北東隅に刀子が置かれていた。

出土遺物

46は刀子で完形品である。全長120mm、背幅5mmで、関部は明確ではないが刃部長は10.5mm程と考えられる。刃部中程には木質の付着が認められる。

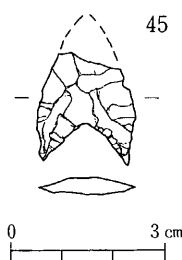
その他、埋土中から須恵器の小片が出土した。

（2）ST004

主軸をN-14°-Eにとり、墓壙は20.2×7.2mの長方形プランを呈す。出土遺物は認められなかった。

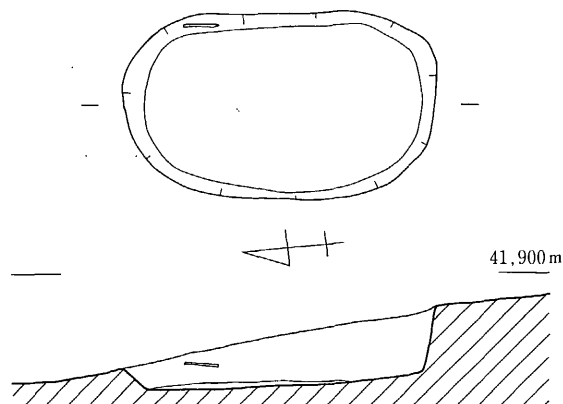
（3）ST006

主軸をN-10°30'-Eにとり、墓壙は17.8×6.4mの長方形プランを呈す。削平が著しく、壁はほとんど残っていない。床面中央から黑色土器が出土した。

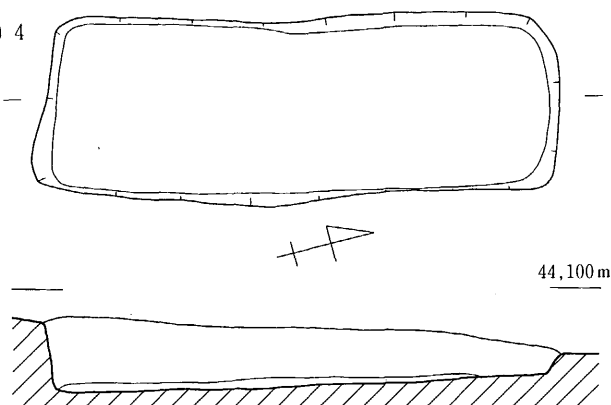


第15図 脇田B 3号墳出土鉄器実測図（縮尺 2/3）

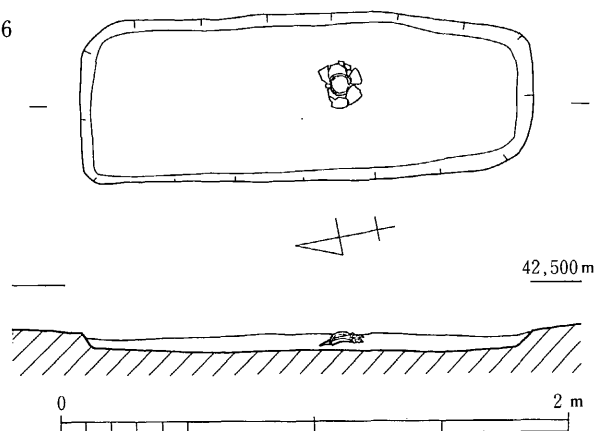
ST001



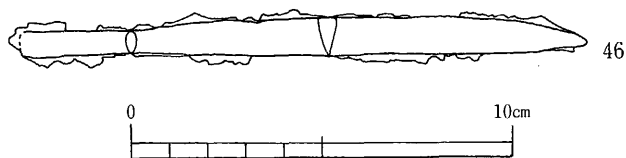
ST004



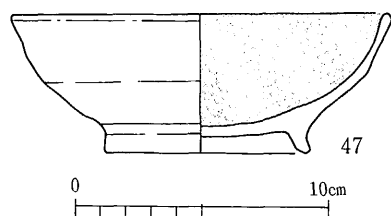
ST006



第17図 ST実測図 (縮尺 1/30)



第18図 ST001出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)



第19図 ST006出土土器実測図 (縮尺 1/3)

出土遺物

47は黒色土器A類の埴で、口径14.9cm、器高5.5cm、高台径8.3cmを測る。全体に磨滅が著しく調整は不明瞭である。体部中央にはあまい稜線が巡り、底部には低い高台が貼付される。胎土は0.5mm大の砂粒をやや多く含み、焼成はあまい。外面色調は灰白色を呈す。

4. 土 壙

(1) SK002

主軸をN-73°-Eにとり、1.05×1.5m程の略方形プランを呈す。全体に残りが悪く、壁体は約15cmを測る。

(2) SK005

遺構の北側を失うが、主軸をN-14°-Eにとる長方形プランを呈す。幅9.8m、残存長1.4mを測る。壁高は10cm程で、残りが悪い。床面北端から土師器甕の胴部が出土した。器形は丸底を呈すと思われ、外面は縦方向の刷毛目が施され、内面はヘラ削りされる。

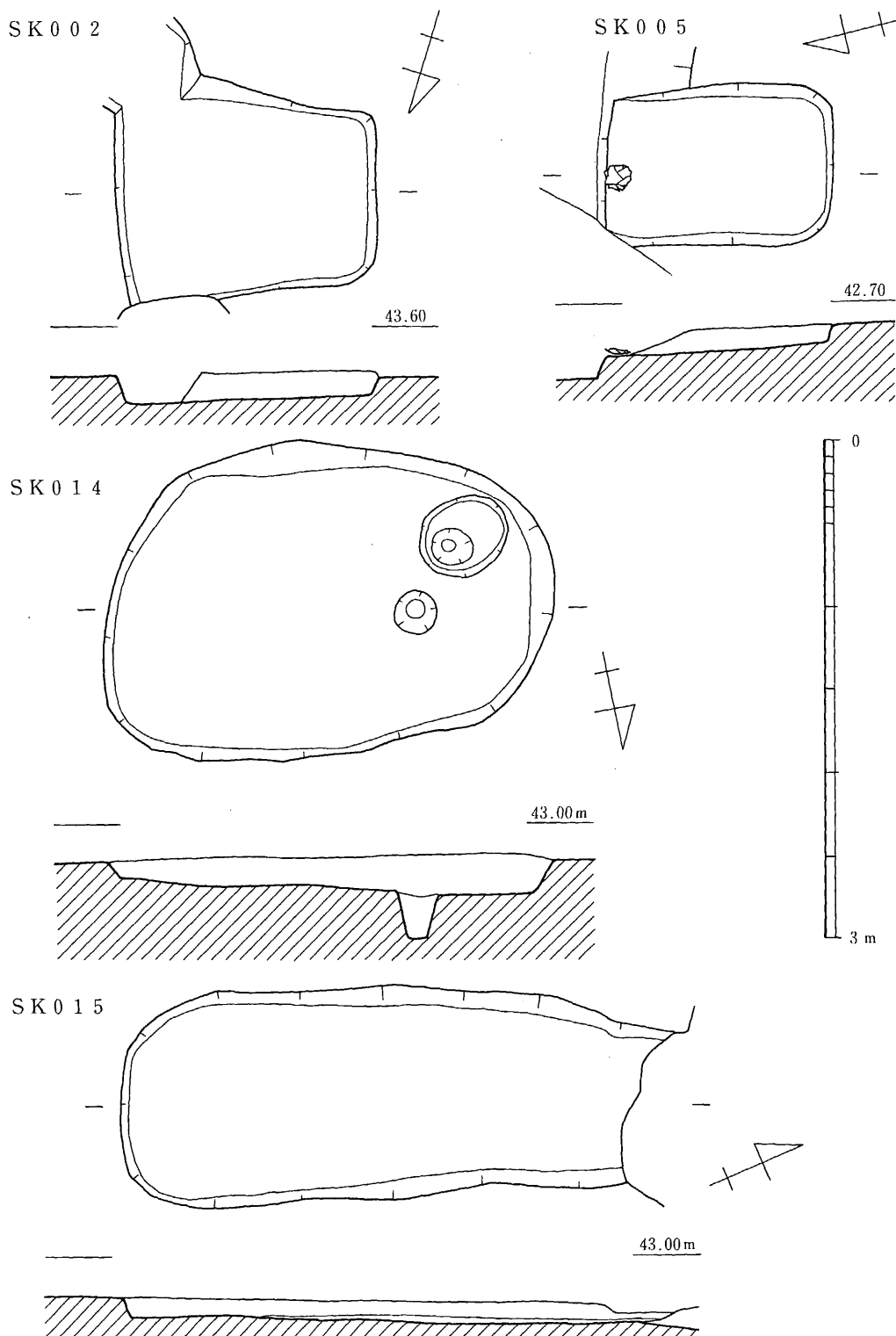
(3) SK014

N-79°-Wに主軸をとる不正楕円形の土壙である。壁高は25~10cmで、残りは悪い。

出土遺物

48は土師器の坏で、1/4足らずの小片である。口径13.6cm、底径8.8cm、器高2.4cmを測る。体部は大きく開き、口縁部は外反気味に収まる。体部は内外面ともヨコナデされ、底部は糸切り離しで、刷毛

目状の板状圧痕がつく。49は瓦質土器の小片で、鉢の類と思われる。口縁部は内側に引き出し、口唇部は平坦に仕上げる。口縁下の体部は僅かな丸みを帯びる。口縁部はヨコナデされ、外面体部にはキメが細かい刷毛目とそれを切るキメの粗い刷毛目が認められる。内面はヨコナデで丁寧に仕上げられる。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。50も鉢の小片であるが、底



第20図 SK実測図① (縮尺 1/40)

部の一部が弾け、外面には多量の煤が付着する。内面は目が細かい横方向の刷毛目のあと、摺目が付く。

(4) SK015

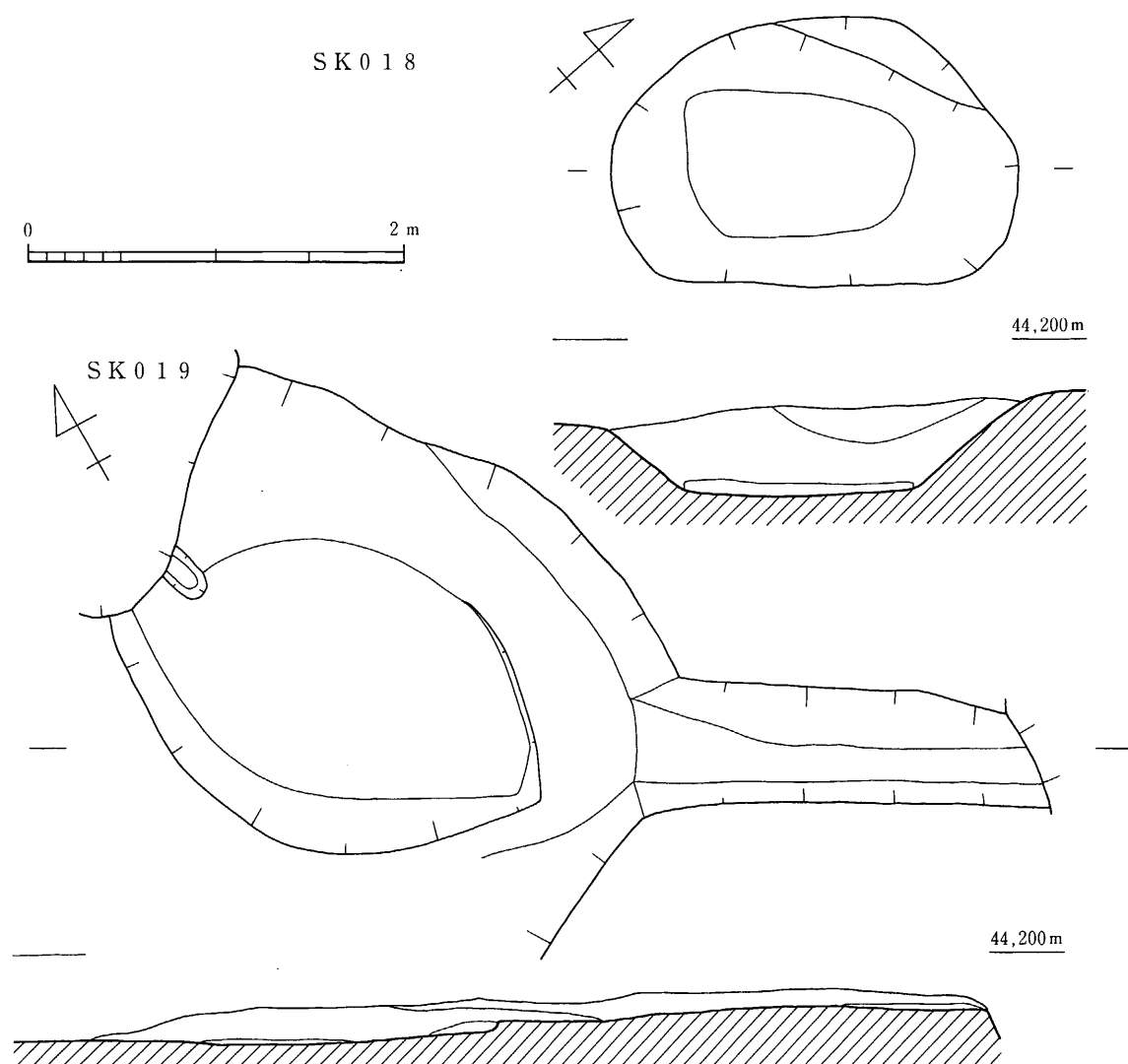
北側を攪乱により切られるが、N-23.5°-Eに主軸をとる長方形プランを呈す。幅1.3m、残存長3.3mを測るが、遺構の残りは悪く、壁高は10cm程度しか残っていない。

(5) SK016

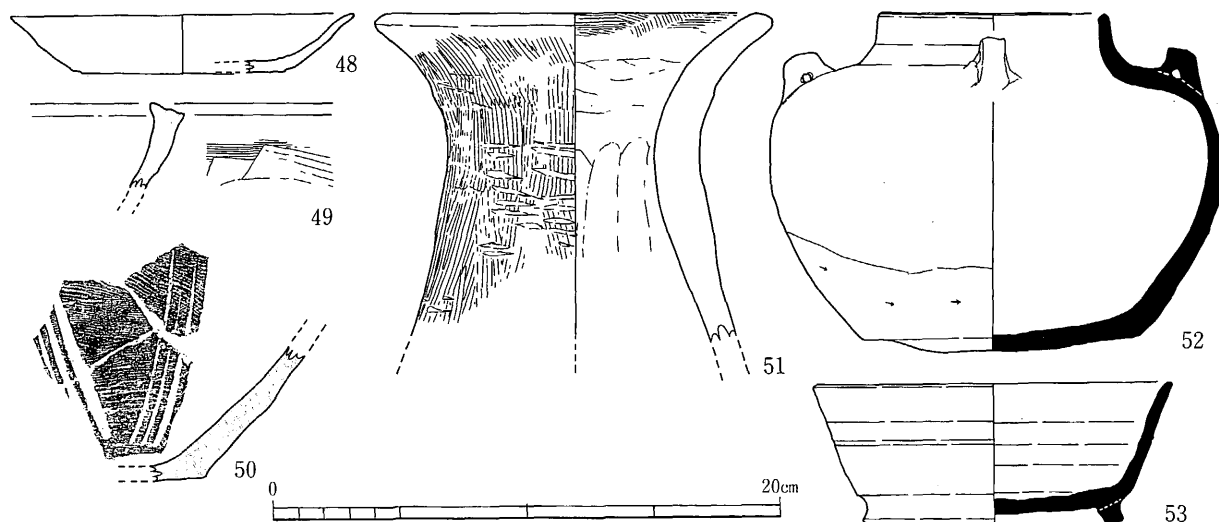
遺構の残りが悪い上、試掘溝に切られ、ほとんど床面しか残っていない。幅1m程の方形プランを呈す土壙と思われる。

出土遺物

51は器台の上半部で、受部の1/2が欠失する。受部径15.6cm、残存高14.2cmを測る。残存脚部は直線的に外傾して延び、受部は高い位置で折れ大きく外反する。外面は全体に刷毛目が施さ



第21図 SK実測図② (縮尺 1/40)



第22図 SK出土土器実測図（縮尺 1/3）

れるが、脚部の一部に叩き痕が残る。内面は受部にヨコナデ、脚部に縦方向のナデが施され、口唇部下には刷毛目を巡らす。

（6）SK018

N-41°-Eに主軸をとり、2.15×1.45mの略楕円形のプランを持つ。床面は1.2×0.8mを測り、壁体は緩やかな傾斜を持つ。出土遺物は弥生時代後期～終末期のものと考えられる甕や補修孔のある高坏脚の破片が出土した。

（7）SK019

SK018に切られる不正楕円形プランを呈す土壌である。床面からは須恵器の短頸壺と坏身が出土した。全体に残りが悪く、東側の溝状遺構が伴うものかどうかは明確にしえなかった。

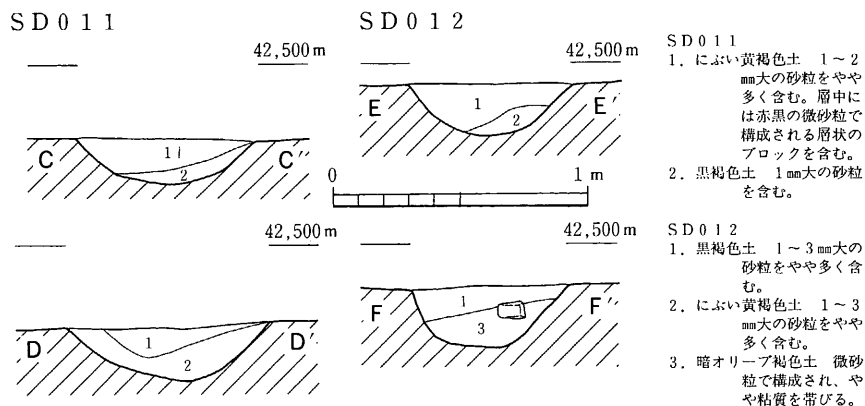
出土遺物

52・53ともに床面から出土した須恵器である。52は口頸部の1/2と胴部の一部を欠失する短頸壺である。口径9cm、器高13.5cm、最大径17.8cm、底径11cmを測る。口頸部は肩が張る胴部から屈曲して立ち上がる。肩部には4個の耳が貼付され、それぞれ4mm程度の孔が、貼付後に棒状工具であけられる。底部は平底であるが、中央部が押し出されたようにやや張り出す。外面上半はヨコナデで調整され、下半は手持のヘラ削りが丁寧に施される。内面もヨコナデ・ナデで仕上げられるが、僅かに円形の当て具痕が認められる。53は坏身で底部の大半と口縁から体部にかけての1/5が残る。口径14.2cm、器高5.7cm、高台径10.3cmを測る。体部は高く、ほぼ直線的に外傾して立つ。高台は断面四角形を呈し、体部と底部の屈曲部のすぐ内側に、外側に踏ん張るようにやや傾斜して貼付される。

5. 溝

(1) SD011

N-69°-Wに主軸をとる溝で、幅は東端で80cmを測り、断面「U」字状を呈す。深さは東端で20cmを測り、徐々に浅くなり、東端より8.5mの位置で消失する。本調査区が所在する低丘陵を緩やかに上るものと推定される。



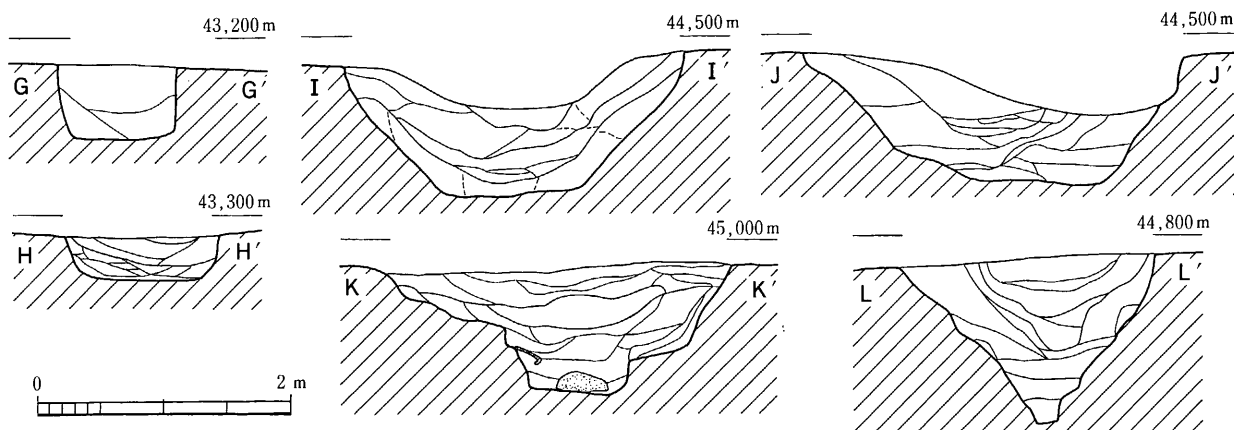
第23図 SD011・012土層断面図(縮尺 1/30)

(2) SD012

SD011の南側約5.5mを平行して走る溝で、両溝の芯心の距離はちょうど6mを測る。幅は東端で60cm、深さ25cm程度で、SD011同様に西側に向かって徐々に浅くなり、東端から11.5mで消失する。

(3) SD017

調査区を横断する溝で、概ねN-60°-E方向に走り西側で屈曲し、直角方向に走る(SD017b)。一方、屈曲部手前で、N-37°-E方向に主軸をとり走る溝がある(SD017a)。この溝は2次調査でも検出され、方位を僅かに南に曲げる。断面の観察の結果、SD017bがSD017aに先行する。SD017の東側は削平されていることもあるが、浅く、断面「コ」

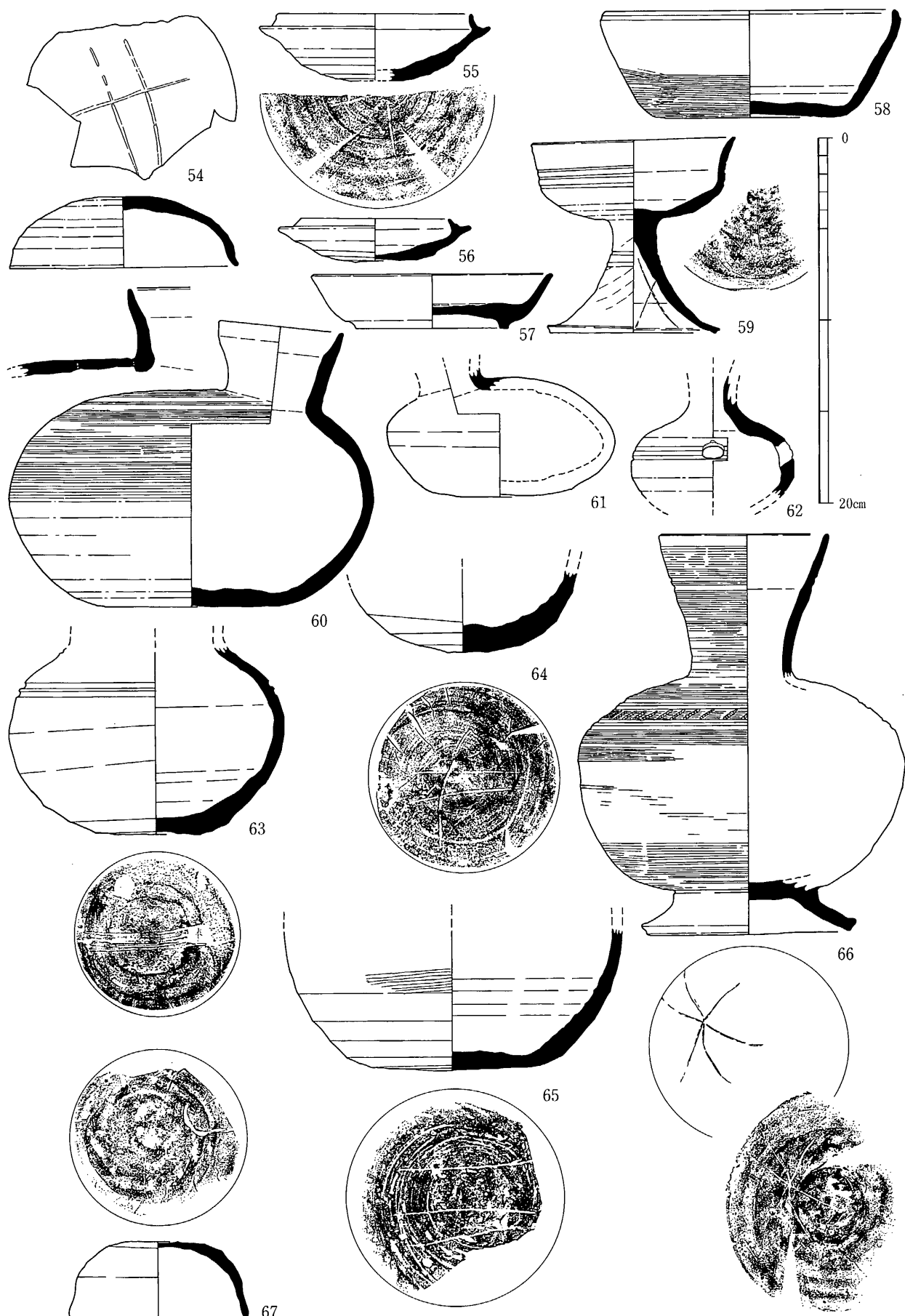


第24図 SD017土層断面図(縮尺 1/60)

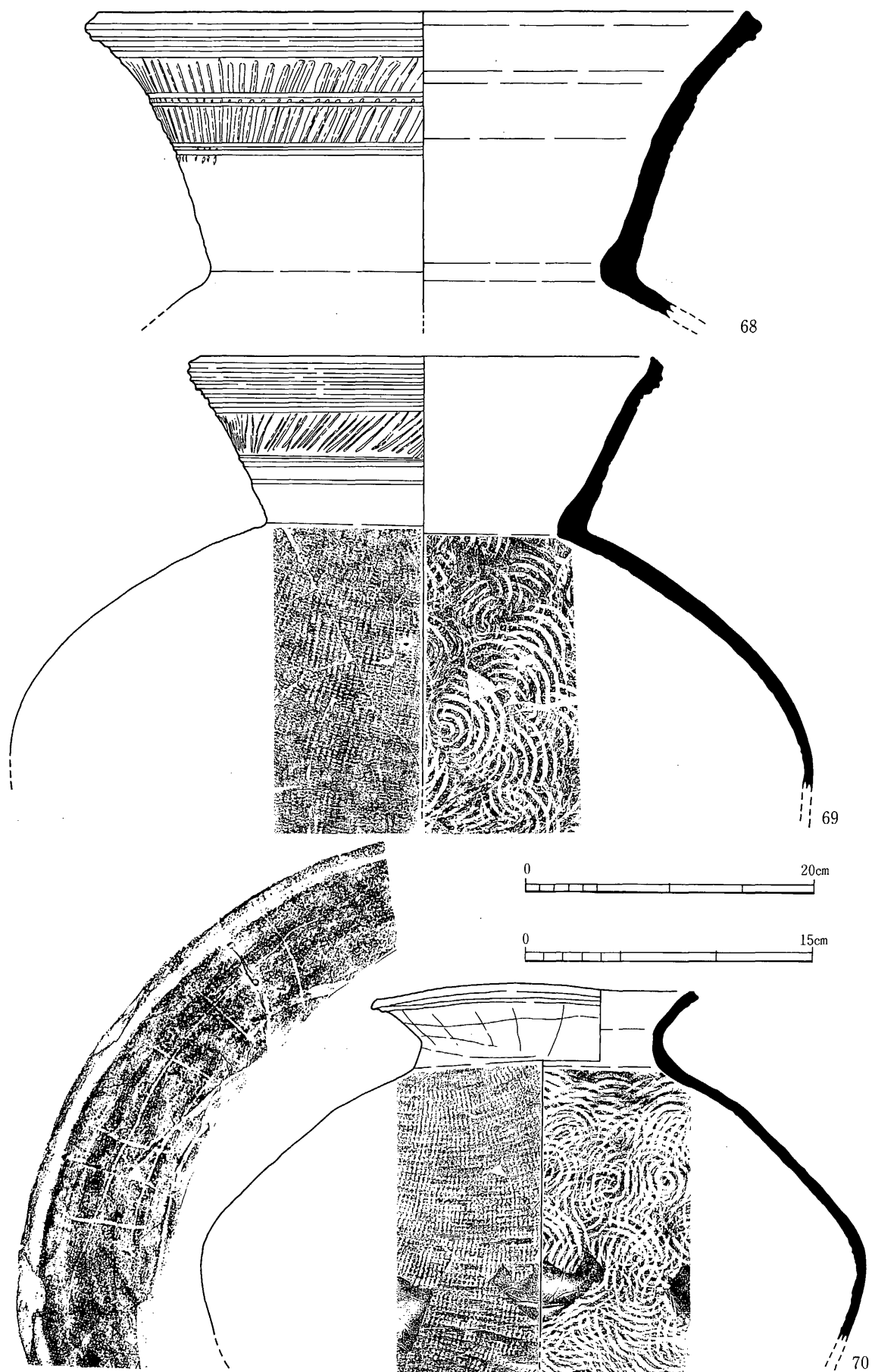
字状を呈す。屈曲部東側は逆台形を呈し、SD017bは逆台形的な形状を呈しながらも段状に落ち、床はSD017東側のような断面形状を呈す。SD017aは「V」字状を呈し、底は細い断面「コ」字状を呈す。

出土遺物

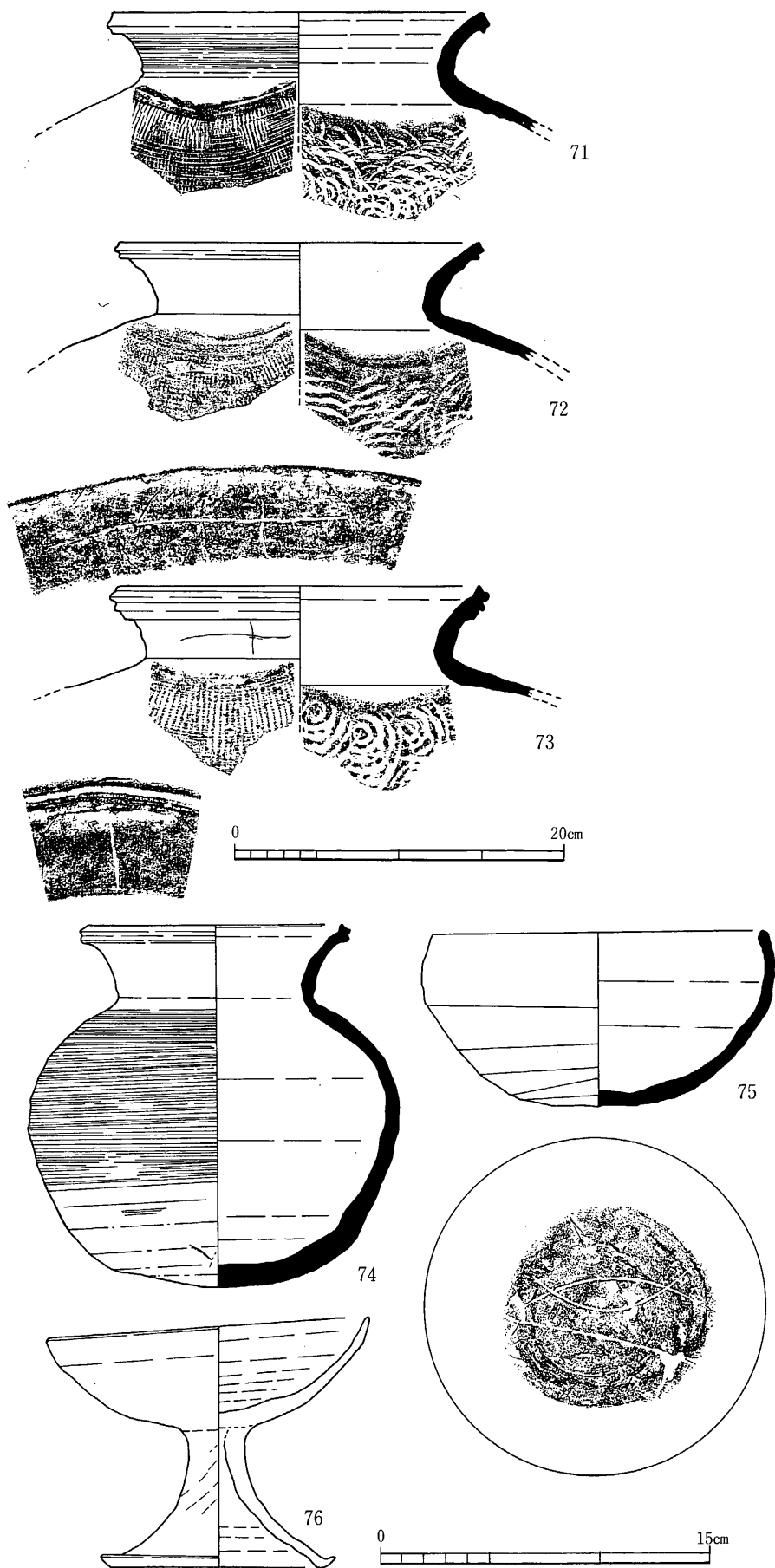
54～73は須恵器で、57・58・65を除きSD017bから出土した。54は坏蓋で口縁部から天井部にかけての破片で、口径12.5cm、器高3.9cmを測る。天井部から体部にかけて緩やかに下り、口縁部は僅かに開く。55は坏身の1/2程の破片で、口径10.4cm、受部径12.6cm、器高3.7cmを測る。立ち上がりは内傾し、中程から緩やかに立ち上がる。受部はやや上方に引き出される。体部から底部にかけて緩やかにおさまる。56は口縁部から体部の一部を欠失するが、完形に近い。口径8cm、受部径10.5cm、器高2.4cmを測る。立ち上がりは低く、内傾する。受部はやや上方に引き出され、体部は直線的に平坦な底部へ移る。57は坏身で約1/2の破片で、一部口縁を欠失する。口径13.2cm、器高3cm、高台径8.3cmを測る。体部は短く、口縁部は僅かに外反する。体部と底部の境から5mmほど内側に低い断面四角形の高台が貼付される。58は鉢で上半部の多くを欠失する。口径16.2cm、底径10.5cm、器高5.9cmを測る。体部は直線的に外傾し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部下には1条の沈線が巡る。体部下半はカキ目が施され、底部は回転へう削りされる。59は高坏で、坏部の1/2が欠失する。口径11.1cm、脚裾径9.35cm、器高10.8cmを測る。体部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がり、底部は緩やかな丸みをもつ。脚部はアサガオ状に開き、端部は平坦におさめる。筒部中位上部に2本の沈線を巡らす。60・61は平瓶である。60は体部の1/3程を欠失する。口径6.75cm、最大径19.8cmを測る。体部は扁球状で、底部は径10cm程の平底を呈す。体部上半はカキ目が施され、下半は回転へう削りされる。61は口頸部を欠失する。体部はソロバン玉状を呈し、最大径12.5cmを測る。底部は手持のへう削りで平坦に仕上げ、径7.1cmを測る。62は甗の体部の破片である。体部中位に2条の凹線が巡り、下半は回転へう削りされる。63は短頸壺の体部から底部にかけての破片で、胴部最大径15cmを測る。胴部最大径位の上部に2条の沈線が巡る。体部はヨコナデされ、底部は回転へう削りで仕上げられる。64・65も壺の底部と考えられる。64は器壁が厚く、丸底を呈す。底部は回転へう削りが施される。65は平底を呈し体部下半から底部にかけて回転へう削りされる。体部のへう削りの上部に僅かにカキ目が認められる。66は脚付きの長頸壺で、SD017の床面から出土した。口縁部の1/3が欠失するが、他の部分は完存している。口径9.25cm、最大径17.7cm、底径11.65cm、器高21.9cmを測る。口頸部は直線的に外傾するが、口縁部周辺はやや脹らみ気味となる。体部はやや肩が張り、体部下半も張りを持ちながら底部に至る。脚部は大きく開き、端部は平坦におさまる。外面は底部を除く全体にかキ目が施され、肩部には2条単位の沈線を上下に巡らし、その間に櫛状工具による刺突が施される。67は壺蓋としたが、坏身の可能性もある。天井部は完存するが、口縁部と体部は1/7程度しか残っていない。口径は9.6cm、器高4.2cmを測る。体部はやや外傾し、天井部は手持のへう削りが施される。68・69は大型の甕である。68は口頸部の小片で、口径47.2cm、残存高21.45cmを測る。口頸部は僅かに外反し開く。口縁部は外側に肥厚し、1条の沈線を巡らす。頸部上半にはへう状工具による斜行文を施し、その上下と中央に2条単位の沈線を巡らす。僅かに残る体部には、外面に簾状叩きが、内面に青海波の当て具痕が残る。69は口頸部と体部上位の一部が残る。口径33.1cm、残存高30.3cmを測る。口径部は直線的に開き、口縁部は外側に肥厚させる。この部分はへう状工具で沈線を巡らすことにより3条の段を形成する。口縁内面は整形時に凹状を呈す。頸部外面上半にはへう



第25図 S D 0 1 7 出土土器実測図 (縮尺 1/3)



第26図 SD 0 1 7 出土土器実測図 (縮尺 1/4・1/3)

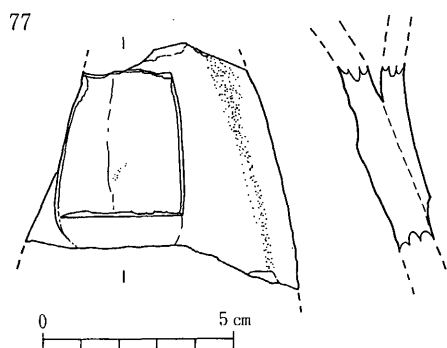


第27図 SD 0 1 7 出土土器実測図 (縮尺 1/4・1/3)

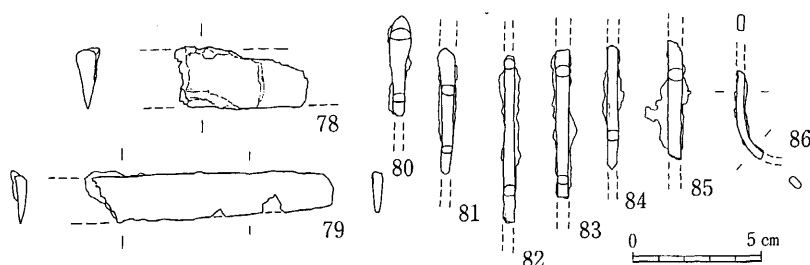
状工具による斜行文を施し、その上下に2条単位の沈線を巡らす。体部には、外面に格子状叩きが、内面に青海波の当て具痕が残る。70～73は中型の甕である。70は口縁部と体部の一部が残存する外は、いずれも口頸部付近の小片である。口径22.85cm、残存高24.9cmを測る。口縁部は外側にあまい沈線を1条巡らし、端部は平坦におさめる。1/4ほど残る体部は焼成前の変形が認められ、いびつな形をしている。

71～73はそれぞれ口径23.2cm・21.8cm・22cm、残存高7.4cm・6.8cm・6.3cmを測る。口縁部は71が外側を凸状に肥厚させ、72・73は肥厚させた口縁部に段を

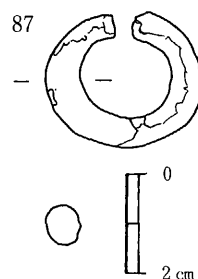
形成する。いずれも体部には叩き痕が残り、70・73には頸部にヘラ記号が、71にはカキ目が認められる。74は小型の甕で、体部上半から口頸部の3/4～4/5が欠失する。口径12.35cm、最大径16.85cm、器高16.5cmを測る。口縁部は内側を肥厚させ、外側には1条の段を巡らす。体部は球形に近く、上半部はカキ目が施され、下位から底部にかけて回転ヘラ削りされる。75はいわゆる赤焼きの鉢で体部から口縁部にかけて1/4ほどが欠失する。口径13.1cm、器高9.5cmを測る。口縁部は内湾し、底部は平坦に仕上げられる。体部上半はヨコナデされ、体部下半から底部にかけて回転ヘラ削りされ、底にヘラ記号が認められる。色調は灰褐色を呈し、微砂粒を多く含み、1mm大のものもやや多く認められる。焼成は比較的良好である。76は土師器の高坏で坏部の上半部の大半と脚裾部の4/5を欠失する。口径14.7cm、脚裾径10.65cm、器高11.5cmを測る。坏部は緩やかな半球状を呈し、脚部は外反して広がり、端部は短く跳ね上げられる。焼成はあまく、全体に磨滅している。75・76共にSD017bから出土した。77は褐釉陶器の水注の破片で、取っ手と体部上方の接合部付近の破片で、取っ手中央にはあまい稜線がはいる。78・79は鉄刀と考えられる。78は身の部分と考えられる小片で、身幅2.4cm、背幅0.8cmを測る。79は身部から基部にかけての破片と思われる。身幅と背幅はそれぞれ2cm、4.5cmを測るが、破損が著しいためこの数値を若干上回るとされる。関部は明確ではない。80は柳葉式の鉄鏃で81～85も鉄鏃の基部と思われる。86は釣り針状に湾曲した形状をもつ鉄器の小片である。87は金環で外径2.6～3.1cm、内径1.6～1.8cmを測る。中実の銅胎に金箔をおいたものである。



第28図 SD017出土陶器実測図
(縮尺 1/2)



第29図 SD017出土鉄器実測図 (縮尺 1/3)



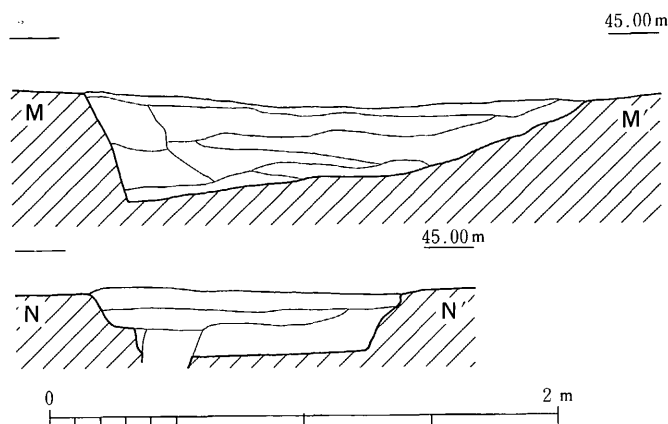
第30図 SD017
出土金環実測図 (縮
尺 2/3)

(4) S D 0 2 1

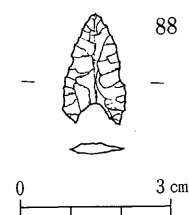
脇田B群3号墳の西で検出した溝で、N-37°-Wに主軸を取る。確認した範囲が短く、時期等を確定できる遺物も出土しなかったため、性格や時期については不明である。

出土遺物

88はチャート製の石鏃で、長さ2.2cm、幅1.2cm、厚み0.2cmを測り、小形ながら丁寧な作りである。



第31図 S D 0 2 1 断面図 (縮尺 1/30)



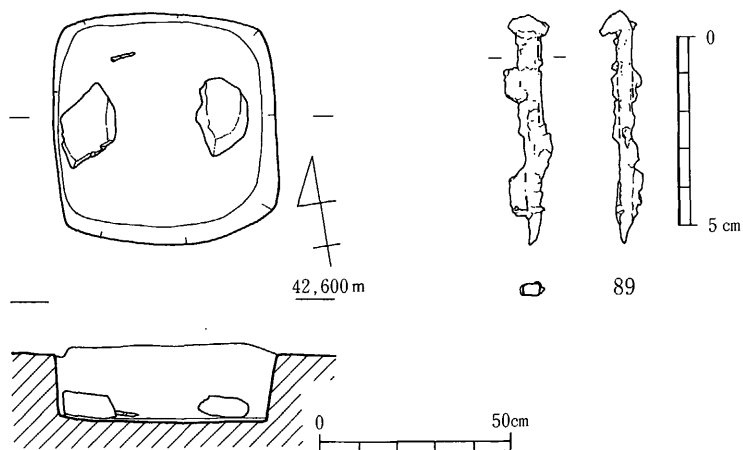
第32図 S D 0 2 1
出土石器実測図 (縮尺 2/3)

S X 0 2 2

一辺1.2mの方形プランを呈す。壁体はほぼ垂直に落ち、床面は平坦である。主軸の両壁際に礫が配され、礫の上面はほぼ同じ高さを呈す。

出土遺物

89は北西より出土した鉄釘である。木質の付着はみられない。また、南東隅からも鉄釘の断片が検出された。埋土からは須恵器・土師器の小片が約50点程出土した。全般に土師器が多い。底部片は底部端から1cm程内側に高台をもつ。

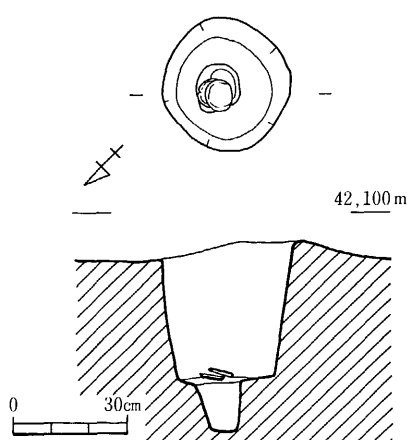


第33図 S X 0 2 2 実測図・出土鉄器実測図 (縮尺 1/20・1/2)

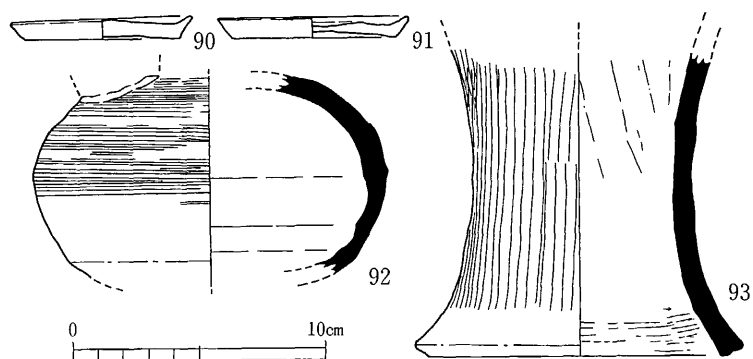
7. ピットの調査

ピットは調査区北半で、その大部分が検出された。その中でP 0 8 5は直径30cm余りの円形プランを呈すピットで、35cm程掘り下げた面から、さらに径10cm、深さ12cm程のピットが掘り下げられる。下段のピットを覆うように小皿が埋置されていた。90は上方、91が下方に置かれていた小皿で、それぞれ口径7.25cm・7.5cm、底径6.1cm・6.3cm、器高0.9cm・0.85cmを測る。いずれも体部は極端に短く、底部は糸きり離しである。

92はP 2 1 9出土の平瓶でS 0 2 8出土の小片と接合した。体部の2/3程の破片である。体部上半にカキ目が施され、下半は回転ヘラ削りされる。93はP 2 2 8出土の器台で、1/2程を欠失

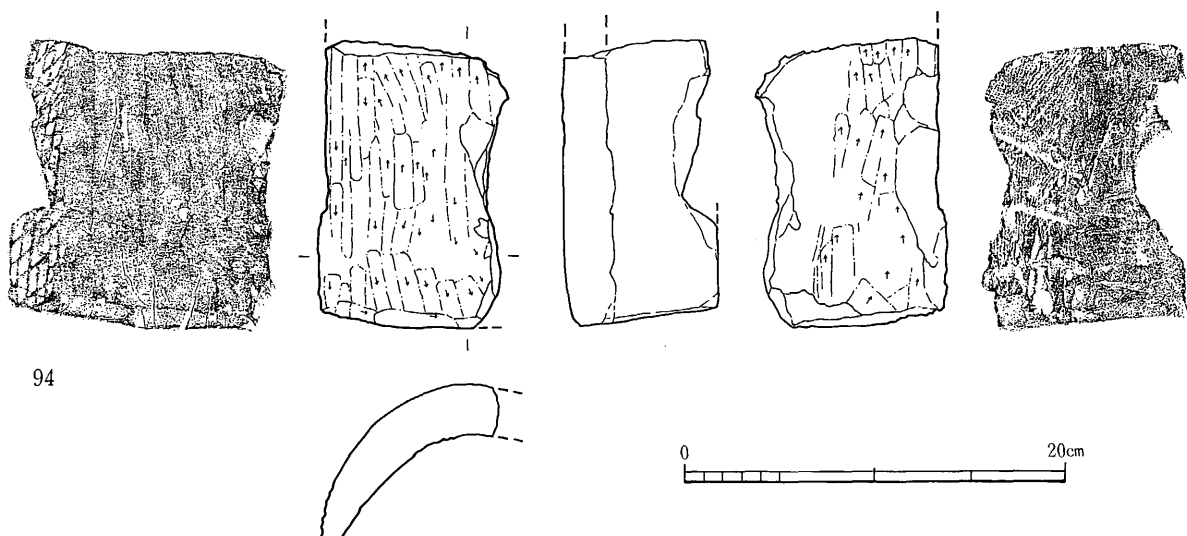


第34図 P 0 8 5 実測図
(縮尺 1/20)



第35図 ピット出土土器実測図 (縮尺 1/3)

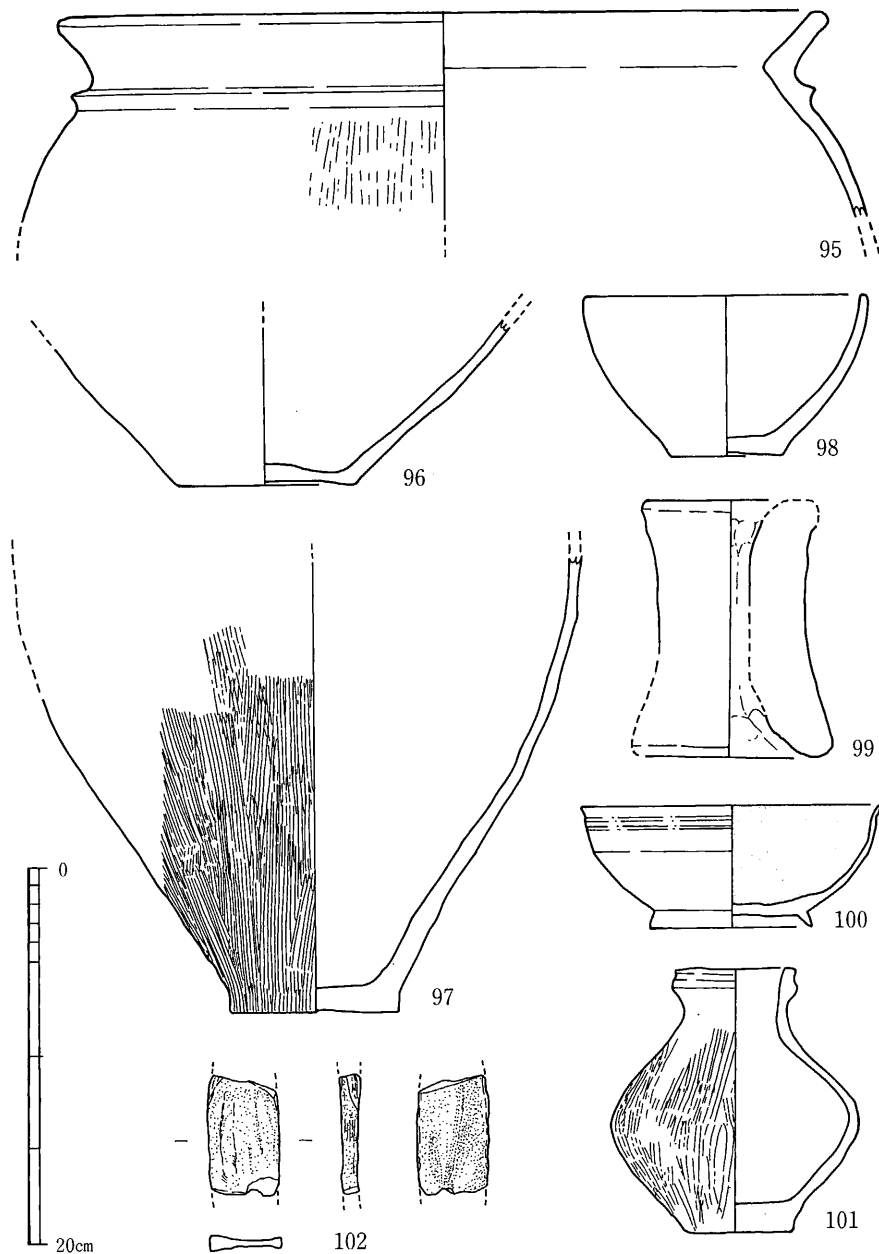
する。94はP 0 9 0から出土した丸瓦片で、斜格子の叩き目に中央部をへう削りする。色調は
橙色を呈し、焼成は良好である。



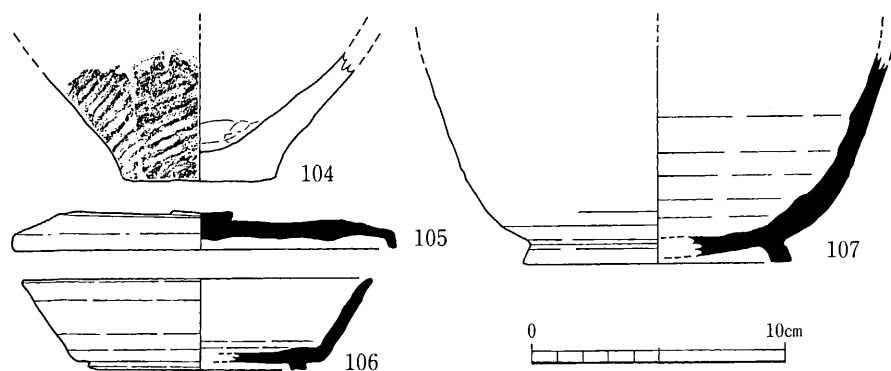
第36図 P 0 9 0 出土瓦実測図 (縮尺 1/4)

8. その他の出土遺物

SD 0 1 7 a の東側、SD 0 1 7 の南側に薄い整地層があり、多くの遺物が混入していた。それぞれ第1整地、第2整地として遺物を取り上げた。整地の時期は不明であるが、古いものではないようである。95~100・102・103は第1整地から出土した。95は甕の口頸部で「く」字状に屈曲し、その直下に断面三角形の凸帯を貼付する。96は甕または壺の底部、97は甕の底部である。98は鉢で1/4程の破片である。口径15cm、器高8.6cmを測る。99は支脚で、約1/2を欠失



第37図 整地面出土土器・石器実測図 (縮尺 1/4)

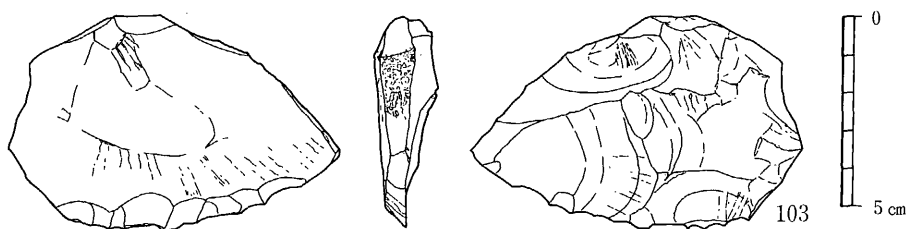


第38図 その他の出土遺物 土器実測図 (縮尺 1/3)

する。100は黒色土器A類の埴で、口縁部の一部を欠失する。口径15.8cm、高台径9cm、器高6.5cmを測る。全体に磨滅が著しく調整は不明瞭である。体部は体部中央にはあまい稜線が巡り、口縁部は僅かに外反気味となる。口縁下には調整時に入ったと思われる浅い凹線が2条巡り、底部には細く尖った高台が貼付される。胎土は0.5mm大の砂粒をやや含み、焼成はあまい。外面色調は橙色を呈す。101は第2整地から出土した小壺で、無傷の完形品であるが、かなり磨滅している。口径6.5cm、最大径13.2cm、底径5.8~6.5cm、器高14.1cmを測る。口縁部直下に断面三角形の凸帯を巡らす。胴部はソロバン玉状を呈し、刷毛目を粗く施す。102は長石砂岩製の砥石で両端を欠失する。上下面と側面の一方に使用が認められる。103はサヌカイト製のスクレーパーでやや横長の剝片を使用する。打痕と反

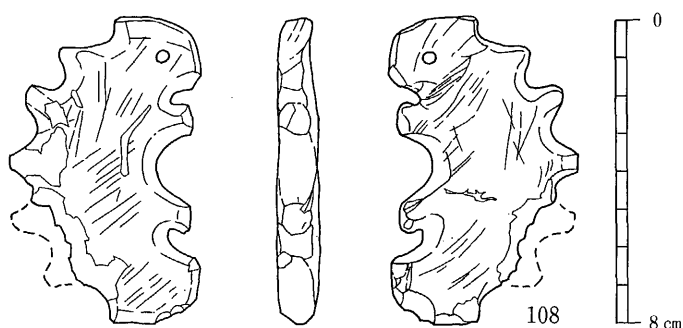
対の辺に片側からのみの加工を施し、刃部を作り出す。

B群3号墳南側の半円形段落ちと、SK018・SK019が検出された周辺の半円形の



第39図 その他の出土遺物 石器実測図 (縮尺 1/2)

段落ちをS028、S029として遺物を取り上げた。104はS028から出土した甕の底部の小片である。底部は平底を呈し、胴部にはやや太めの平行叩きが斜行して施される。内面は底部に指頭痕がみられる。色調は外面灰黄色、内面淡黄色を呈し、焼成は堅緻である。105～107はS029から出土した須恵器である。105は坏身の1/3程の破片である。口径15cm、器高1.5cmを測る。天井部は広く平坦で、中央に擬宝珠形の撮みが貼付される。体部は浅く傾斜し、端部を嘴状に折り曲げ、口縁部をつくる。106は坏身の1/3程の破片で、口径13.8cm、高台径8.56cm、器高3.65cmを測る。体部は直線的に外傾し、高台は底部端から7mm程内側に貼付される。107は壺の下半で、1/6程が残る。高台径10.6cm、残存高8.3cmを測る。高台は外傾して貼付されるが、端部は全体が接地するよう仕上げられている。底部や体部に焼成時の脹らみがある。108は調査区の北端で、表土剥土時に遺構検出面から出土した子持ち勾玉である。滑石製で、長さ8.1cm、厚みは1.1cmを測る。出土地点の周りには、本資料に関係するような遺構はなく、過去の造成時に押し込まれたものと思われる。



第40図 その他の出土遺物 勾玉実測図 (縮尺 1/2)

IV ま と め

1. 住居跡について

3軒の住居跡が検出されたが、時期を確定しうる資料が出土したのはSI013のみである。SI013出土の土器はすべて在地形の土器である。甕は胴部最大径が胴部中央のやや上部にあり、底部がやや尖り気味の丸底を呈す。胴部の叩きは横、または斜方向の刷毛目で丁寧に消され、胴部下位は縦方向の刷毛目が施される。壺は口縁部の内傾は弱く、底部と胴部の境目が痕跡的に残っている。また、直立する口頸部をもつ短頸壺などの様相から弥生時代の最終末期に位置付けられよう。

SI010は時期を確定しうる資料がないが、カマドを有していることから古墳時代以降のものと思われる。

2. 古墳について

B群3号墳は、削平や攪乱により大破しており、出土遺物も時期を確定しうるような状況では出土していない。調査で確認し得た点を整理してみると、①規模は径10～11mの円墳と考えられ、周囲に周溝をもつ。②石室は玄室壁長1.25～1.3m、幅1.7～1.9m、羨道部長2.5mと小規模で、羨道部の腰石等を縦長に立てる等、築造上の特徴が認められる。③出土した遺物は明確に原位置を保つものはない。包土の土器は27がⅣA期に位置付けられるものもあるが、Ⅶ期のものが多い。以上3点に整理できる。古墳の築造時期については時期を確定しうる遺物の出土に恵まれなかった。石室構造は田村悟氏の筑前南部地域の終末期古墳分類にあてはめると、単方Ⅱeとなる(田村1999)。石室の規格は柿原古墳群Ⅰ地区20号墳に近似する(福岡県教育委員会1986)。この古墳はやや小振の同21号墳とともに横穴式石室分類ⅦA類に分類され、20号墳閉塞から出土した須恵器坏によって、7世紀前葉頃の年代を与えられている。本墳出土の土器では、27の須恵器が、やや古い時期ではあるが、比較的近い時期である。しかし、柱状に石材を立て、単体で壁面を構成する点などは、より後出的な感じを受ける。また、古墳の前庭部や周溝から出土したⅦ期の遺物は、この時期に古墳が墳墓として利用されていた可能性を示すと考えられる。

3. 墳墓について

墳墓で共伴遺物が出土したのはST006のみである。47は中島恒次郎氏分類(中島1992)の黒色土器A類Ⅲ-5類に分類されている。出土傾向として山本信夫氏のⅪ～Ⅻ、もしくはⅫⅢ期にあるとされている(山本1990)。隣接する大宰府条坊跡第123次調査地点で検出した墳墓に比べ後出である。

4. 土壙について

SK014から出土した遺物はいずれも小片である。48は山本編年のⅩⅦ期に属すると考えられ、他の遺物は小片のため時期を確定し得ないが、総じて坏の時期としても矛盾はない。

SK019から出土した53は小田編年Ⅶ期のものと考えられ、52の短頸壺もほぼ同時期と見てよいと考える。

5. 溝について

SD011とSD012は芯心で6mの距離で平行して走っており、対を成すものと考えたほうが合理的である。ただし、大宰府条坊との関連を考えた場合には、主軸方位がN-69°-Wを示すのは問題がある。因みに大宰府条坊跡第99次調査における官道の主軸方位はN-54°-Wを示す。

SD017は大宰府条坊跡第123次調査で検出したSX1001を起点とすると思われる。特にSD017bから多くの土器が出土しており、その大半が古墳時代のもので、概ね小田編年のⅢb期からⅤ期が主体を占める。床面から出土した66もⅢb期頃のものとしてよいと考える。一

方東側へ下ると出土遺物も後出的な様相もみられるが、資料が少なく断定できない。

S D 0 2 1 も大宰府条坊跡第123次調査で検出した S D 1012 に連続する可能性が高い。

6. 脇田古墳群について

(1) 脇田古墳群と周辺の古墳

本調査と隣接する大宰府条坊跡第123次発掘調査、さらに小さな谷部を挟んだ脇田遺跡から、これまで知られていなかった古墳が水田や住宅の下から出土した。これら一連を脇田古墳群とした。古墳群は天拝山の北東側の裾部に位置する62.8mを頂部とする小山付近から、さらに北に延びる幅の狭い低丘陵の根元付近に所在する。現在まで4基の古墳が発見されているが、発見された丘陵ごとに群分けをしている。A群は1984年の脇田遺跡第1次として調査した丘陵で、現在まで1基しか確認されていない。上部構造物は既に削平され石室の基礎部分と周溝、墓道が確認された。周溝は全周すると考えられ、外径14m、内径11mを測る。主体部は羨門と玄室部の側壁腰石部分が残るのみであるが、石室の掘方や残存する石材の配置より両袖型の単室石室で、羨道は付設しないと考えられる。玄室は胴が張る平面形を呈している。腰石は小振りのものが用いられる。須恵器はⅢA期の坏身が1点出土した。A群と小さい谷部を挟み東側の丘陵に位置する古墳群をB群としている。1・2号墳は大宰府条坊跡第123次調査で、3号墳は本調査で確認された。1号墳は削平され、真上に民家が建っており上部構造は不明である。主体部の南半に弧状に3本の溝が巡り、周溝と考えられる。これから直径12mの円墳である可能性が高い。主体部は大破しており形態は不明であるが、石室の掘方は3×4mの方形プランを呈すと思われるが、深さは20～40cm程しか残っていない。石室は僅かに残る石材から幅は1.5m程であろうか。羨道や墓道の痕跡はみられない。これらの点から横口部に段があった事も想定される。第123次調査の報告当時は横穴式石室としたが、初期の横穴式石室をもつにしては墳丘規模が小さく、石室規模の想定値の幅がやや広い傾向はあるものの、竪穴系横口式石室の可能性も考えられる。出土遺物は周溝内からⅠB期(TK023)とⅢB期の須恵器が出土した。2号墳は墳丘が失われ、石室の奥部分が確認されたにとどまる。石材は左側壁の腰石1個とその前面に僅かに敷石が原位置を保っている。腰石は1.4×0.7mと比較的大振りの石材を用いている。その角にやや小振りの石材が乗っていることなどから、6世紀後半代から7世紀前半代にみられる横穴式石室を持つ古墳と推測される。遺物はまったく出土していない。3号墳の詳細は前述のとおりである。これらの古墳はすべて削平により大破し詳細なことは不明な点が多いが、B群は概ね1号墳が尾根の頂部に、2号墳が1号墳の後ろ、頂部の西側斜面に、3号墳は東側斜面に築造され、周辺の著しい削平状況をみると調査された以外にも古墳があったかもしれない。B群が所在する丘陵は北側に細く、長く延び、先端部に埴安神社古墳が、その中間の独立して高くなっている所に唐人塚古墳群がある。埴安神社古墳は、神社社殿の真裏にある円墳で、調査は行われていない。墳丘は径15m程で、両袖複室構造の横穴式石室を持つ。唐人塚古墳群は、3号墳にⅠB期(TK204)と推定される無蓋高坏が出土し、脇田B1号墳出土の須恵器よりやや古い様相を持つ。また、この古墳からはⅢB期、ⅣA期、さらにⅦ期の須恵器が出土しているが、土器の残りは良くない。1号墳も土器の残りが悪く、明確にできないが、須恵器の甕や甕の破片はⅡ期のものとされる。4号墳はⅢB～Ⅴ期、及びⅦ期の比較的多量に出土した資料が出土し、5号墳もⅢB～Ⅳ期、Ⅶ期のものが出土する。6号墳は須恵器の短頸壺や穿孔を有

す土師器甕、黒色土器や土師器坏などの遺物しか残っておらず、明確な築造時期は不明であるが、報告では古墳の立地から5号墳より後出であるとして7世紀代の築造とされる。7号墳もⅦ期の遺物しか出土していないが、残存部から単室の横穴式石室で奥壁幅70～75cm、右壁長95cmの規模とされている。この石室を田村悟氏の筑前南部地域の終末期古墳分類にあてはめると、単方Ⅳdとなる(田村1999)。出土した須恵器は8世紀後半で新しい。報告書に図示されるものはさらに後出するものである。唐人塚古墳群はⅦ期の時期が見られないが、5世紀の後半から8世紀前半まで築造され、さらに多くの古墳からⅦ期の須恵器が出土している。狭川真一氏はこの唐人塚古墳群では6号墳出土の短頸壺や土師器甕について火葬蔵骨器と想定され、ほかの古墳でも8世紀後半まで使用した痕跡があることは、大宰府周辺の古代火葬墓のあり方と異なるとされる。大宰府周辺の古代火葬墓はそれなりの距離を置いて単独で造営されるものが多く、古墳群と関連づけられるあり方を示すものもほとんどない点。また官道よりも外側に意識的に造営されているような点が多いことから、唐人塚古墳群は大宰府の公葬地としての概念から外れた地と考えられ、また西側200mのところにある杉塚廃寺と関連する可能性も示されている(狭川1998)。

(2) 近隣の古墳の概要

脇田古墳群は福岡平野と朝倉平野との境、二日市地狭帯と呼ばれる地域に所在する。この地域(便宜上、北を御笠川と鷺田川の分岐、南を宝満川と山口川の分岐地点とする)にある古墳について概観すると、平野西側に北から宮ノ本遺跡、剣塚古墳群、古剣塚古墳群、埴安神社古墳、唐人塚古墳、原口古墳、八隈古墳群、古賀古墳群、萩原古墳群、立明寺古墳群、平野東側に木本古墳群、鉾ノ浦古墳群、君ヶ畑古墳群、五穀神古墳、カケ塚古墳、上ノ浦古墳、峠山遺跡等がある。ただし、古賀古墳群、萩原古墳群については山口川、上ノ浦古墳、峠山遺跡については宝満川に沿い、二日市地狭帯からやや入った所に築かれる古墳群である。

宮ノ本遺跡は尾根の稜線上に箱式石棺、割竹形木棺、木蓋土壙を内部主体とする6基の古墳が検出された。剣塚古墳群は6世紀中頃に近い後半期に築造された全長42m、前方部幅35m、後円部径21mの前方後円墳である1号墳のほか、6世紀後半の年代が与えられる円墳で、周溝が全周し、外径19m、内径13mを測る3号墳、墳丘を一部残すのみの2号墳がある。2号墳は横穴式石室をもつ円墳になるようである。また、1号墳の下から5基の方墳が隣接して発見され、箱式石棺や粘土床を内部主体とする。埴安神社古墳や唐人塚古墳は前述のとおりである。原口古墳は全長約80m、後円部径約50m、前方部幅約25mと推定される前方後円墳で、3面の三角縁神獣鏡等が出土している。また、隣接して縦穴式石室と縦穴系小石室を内部主体とする古墳が、それぞれ1基所在したといわれる。八隈古墳群は横穴式石室を内部主体とする9基の円墳が確認された。1号墳は6世紀後葉から7世紀末、2号墳は6世紀末、3号墳は7世紀初頭、4号墳は6世紀後葉から7世紀初頭、5号墳は6世紀後葉から6世紀末、6号墳は6世紀後半、7号墳は6世紀末、8号墳は6世紀末頃と考えられている。扇祇古墳群も横穴式石室を内部主体とする円墳で、1号墳は径約17m、6世紀中葉から後半にかけて、2号墳は径18m程で、6世紀後葉のものと思われる。3号墳もほぼ同時期の古墳のようである。立明寺古墳群は以前から9基の古墳が知られているが、宅地造成に伴って調査された。詳細は不明である。

低地帯を挟む東側丘陵上には鉾ノ浦古墳群、君ヶ畑古墳、カケ塚古墳、五穀神古墳が知られるにとどまる。君ヶ畑古墳群1号墳は単室の横穴式石室で、墳丘は既に失われる。出土須恵器

はⅣB期が主体を占める。2号墳は横穴式石室の左壁最下段を残すのみである。カケ塚古墳は6世紀中葉頃の横穴式石室を内部主体とする古墳である。また、御笠川の対岸、四王寺山南裾の来木古墳群では4基が確認され、1号墳は横穴式石室で、7世紀後半の遺物が出土している。このように東側は低地帯西側に比べ、古墳の数が少ない。これは、早くから宅地化が進み、早い段階で消滅したとも考えられるが、近年いくつか残る丘陵部の発掘調査が行われているが、古墳らしいものは発見されていない。もともと西側丘陵には古墳は少なかったのではないだろうか。特にカケ塚古墳や五穀神山古墳が所在する丘陵下には鷺田川が平行して流れ、平地部が少ない事も一因として上げられよう。

一方、東側にしても周辺地域と比較するとその数は少ない。特に群集墳が形成される6世紀以降に限ってみると、その時期と推定されるものは、その規模から首長的性格をもつと考えられる剣塚1号墳をはじめとする剣塚古墳群（3基）、埴安神社古墳（1基）、唐人塚古墳群（7基）、脇田古墳群（3基）、八隈古墳群（8基）、扇祇古墳群（3基）ほどである。

脇田古墳群は山塊の東裾に位置するが、北裾に位置する牛頸地区から白水方面の後期古墳は、中通古墳群（円墳19基）、小田浦古墳群（円墳3基/横穴式石室）、後田古墳群（円墳11基/内横穴式石室7基、小石室3基）、大堤古墳群（円墳3基）、イケ谷古墳群（円墳3基以上）、西浦古墳群（円墳4基）、さらに西浦古墳群の東にある観音山古墳群には100基を超える古墳があるといわれる。これらの古墳に相対する位置の四王寺山南裾には妙見古墳群（円墳3基/横穴式石室〔2基?〕）、陣ノ尾古墳群（円墳2基/横穴式石室、方墳1基/不明、不明1基）、来木古墳群（4基）がある。

二日市低地帯の南側では、山口川流域に位置する萩原古墳群で7基の円墳が確認されているが、まだ調査は行われていない。この古墳から少し離れて径12m余りの墳丘をもつ、6世紀後半代の萩原古墳がある。古賀古墳群は尾根線上に4基の円墳が並ぶ。宝満川西岸には4世紀後半から5世紀前半の4基の周溝墓が発見された峠山遺跡がある。上ノ浦古墳は6世紀代の横穴式石室をもつ円墳で、壁面に彩色が認められた。さらに柚ノ木古墳群（2基/横穴式石室・竪穴系横口式石室）、吉ヶ浦古墳群（3基/横穴式石室）、下高尾古墳（円墳/割竹形木棺）、菖蒲浦古墳群（2基/割竹形木棺・横穴式石室）、塚口古墳群（円墳16基/横穴式石室）がある。また、東岸の宮地岳西裾には天山古墳群（円墳7基）、老松神社古墳群（円墳2基）、脇道古墳群（円墳4基）、阿志岐古墳群（A群/円墳10基、B群/方墳5基、円墳25基、C群/円墳7基、D群/円墳6基）、杉の谷古墳群（円墳4基）のほか単独で5基の古墳が確認されている。さらに上流域には田代古墳群（円墳4基）などがあるが、宮地岳山麓の古墳は一部しか調査されておらず、確認された大半は山林の踏査によるもので、古墳の実数はさらに大幅に上回るものと思われる。

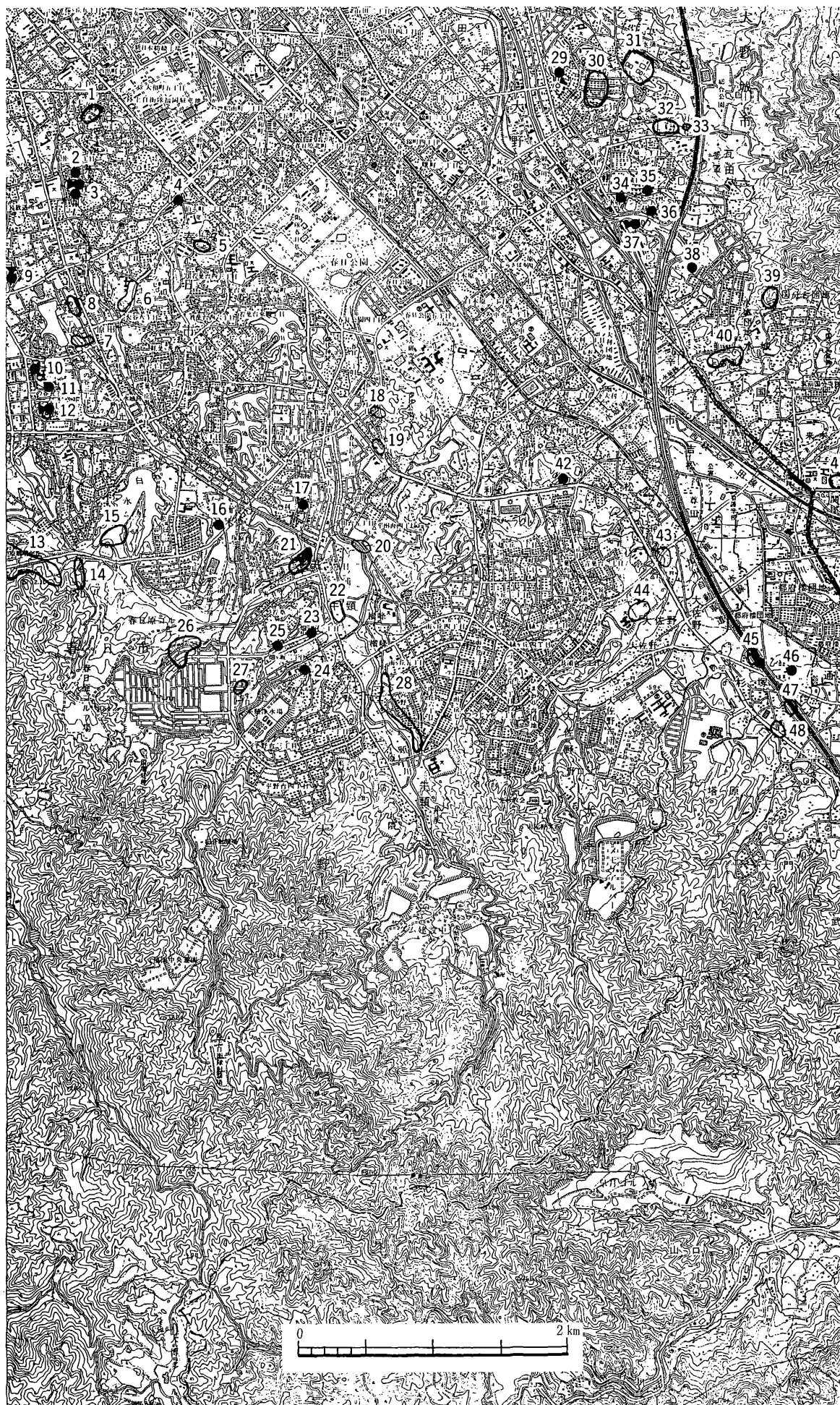
このように、二日市低地帯は近隣の地域に比べ、この部分の古墳の数が少ない。また、古墳群が形成されるのは、剣塚古墳群一帯（唐人塚古墳群・脇田古墳群など）、原口古墳群一帯（八隈古墳群など）、立明寺古墳群一帯（萩原古墳群など）と3つの地区に分けられ、それぞれは1.5km程の間隔をもつ。剣塚古墳群一帯は古剣塚古墳群をはじめ唐人塚でも古い古墳群が検出されているが、剣塚古墳群1号墳は6世紀後半の地域首長墓と考えられる点、唐人塚古墳群や脇田古墳群では終末期まで古墳が築造されること、また8世紀代の唐人塚古墳群の使用、さらに杉塚廃寺の存在など古墳時代後期から奈良時代に至るこの地区については今後検討すべき課題が多い。

引用文献

- 舟山良一外編 1996 「須恵器集成図録 第5巻 西日本」 雄山閣出版(株)
- 山村信榮 1998 「7世紀後半の諸問題」 古文化談叢第41集 古文化研究会
- 狭川真一 1998 「古代火葬墓の造営とその背景」 古文化談叢41集 古文化研究会
- 田村 悟 1999 「終末期古墳の展開」 古文化談叢第43集 古文化研究会
- 中島恒次郎 1992 「大宰府における埴形態の変遷」 中近世土器の基礎研究Ⅷ 日本中近世土器研究会
- 福岡県教育委員会 1986 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告一 6一
- 山本信夫 1990 「統計上の土器一歴史時代土師器の編年研究によせて一」 乙益重隆先生古稀記念論文集

番号	名 称	所在地	番号	名 称	所在地	番号	名 称	所在地
1	熊野神社古墳群	春日市	37	成屋形古墳	太宰府市	73	江永浦古墳	筑紫野市
2	赤井出古墳	春日市	38	浦ノ田古墳	太宰府市	74	古賀古墳群	筑紫野市
3	竹ヶ元古墳群	春日市	39	妙見古墳群	太宰府市	75	立明寺古墳群	筑紫野市
4	伯玄社古墳	春日市	40	陣ノ尾古墳群	太宰府市	76	萩原古墳	筑紫野市
5	西平塚古墳群	春日市	41	来木古墳群	太宰府市	77	萩原古墳群	筑紫野市
6	大谷古墳群	春日市	42	吉松古墳	太宰府市	78	峠山遺跡	筑紫野市
7	一の谷古墳群 1～3号墳	春日市	43	前田古墳群	太宰府市	79	上ノ浦古墳群 1号墳	筑紫野市
8	一の谷古墳群 4・5号墳	春日市	44	宮ノ本古墳群	太宰府市	80	イカリノ上古墳	筑紫野市
9	日拝塚古墳	春日市	45	剣塚古墳群	筑紫野市	81	鳥井元古墳	筑紫野市
10	向野古墳	春日市	46	埴安神社古墳	筑紫野市	82	銭塚古墳	筑紫野市
11		春日市	47	唐人塚古墳群	筑紫野市	83	諸田仮塚古墳群	筑紫野市
12	天神山古墳群	春日市	48	脇田古墳群	筑紫野市	84	仮塚古墳群	筑紫野市
13	観音山古墳群	那珂川町	49	君ヶ畑古墳群	太宰府市	85	大牟田古墳群	筑紫野市
14	西浦古墳群	春日市	50	鉾ノ浦古墳群	太宰府市	86	木山古墳	筑紫野市
15	白水池古墳群	春日市	51	三浦古墳群	太宰府市	87	薬水古墳群	筑紫野市
16	座頭谷古墳	春日市	52	菅谷古墳群 1号墳	太宰府市	88	名越古墳群	筑紫野市
17	惣利古墳	春日市	53	菅谷古墳群 2号墳	太宰府市	89	兄弟塚古墳群	筑紫野市
18	向谷古墳	春日市	54	塚口古墳群	筑紫野市	90	峰古野古墳群 1号墳	筑紫野市
19	春日平田北古墳群	春日市	55	松ヶ浦古墳	太宰府市	91	天山古墳群	筑紫野市
20	春日平田西古墳群	春日市	56	集り古墳群	太宰府市	92	老松神社古墳群	筑紫野市
21	塚原古墳群	春日市	57	六本松古墳	筑紫野市	93	脇道古墳群	筑紫野市
22	塚原古墳群	大野城市	58	柚ノ木古墳群 4号墳	筑紫野市	94	阿志岐古墳群A群	筑紫野市
23	畑ヶ坂古墳	大野城市	59	柚ノ木古墳群 3号墳	筑紫野市	95	阿志岐古墳群B群	筑紫野市
24	胴ノ元古墳	大野城市	60	柚ノ木古墳群 2号墳	筑紫野市	96	阿志岐古墳群C群	筑紫野市
25	月の浦古墳	大野城市	61	柚ノ木古墳群 1号墳	筑紫野市	97	阿志岐古墳群D群	筑紫野市
26	後田古墳群	大野城市	62	下高尾古墳	太宰府市	98	阿志岐古墳	筑紫野市
27	小田浦古墳群	大野城市	63	吉ヶ浦古墳群	太宰府市	99	宮崎古墳	筑紫野市
28	中通古墳群	大野城市	64	今王古墳群 1号墳	太宰府市	100	杉の谷古墳群	筑紫野市
29	ウド古墳	大野城市	65	今王古墳群 2号墳	太宰府市	101	田代古墳群 1号墳	筑紫野市
30	銀山古墳群	大野城市	66	菰浦浦古墳群	太宰府市	102	田代古墳群 2号墳	筑紫野市
31	原口古墳群	大野城市	67	渡内古墳群	太宰府市	103	殿様塚古墳群	筑紫野市
32	雉子ヶ尾古墳群A群	大野城市	68	池田古墳群	太宰府市	104	山家古墳群A群	筑紫野市
33	雉子ヶ尾古墳群B群	大野城市	69	カヶ塚古墳	筑紫野市	105	山家古墳群B群	筑紫野市
34	金山古墳	大野城市	70	五穀神古墳	筑紫野市	106	山家古墳群C群	筑紫野市
35	深町古墳	大野城市	71	原口古墳群	筑紫野市	107	本谷古墳群	筑紫野市
36	笹原古墳	大野城市	72	八隈古墳群	筑紫野市			

筑紫地区古墳(群)一覧表 (番号は第41図と対応)



第41图 筑紫地区古墳分布图





註 杉塚廃寺は確認されている建物跡が、法隆寺式伽藍の中門と金堂とした場合の想定。一部図示した回廊は発見されていない。

第42図 脇田古墳群周辺古墳等位置図（縮尺 1/3,000）

版 图



調査区全景（上空から）



(1) S I 0 0 9 (西から)



(2) S I 0 1 0 (南から)



(1) SI 013 (東から)



(2) 脇田B3号墳全景 (上空から)



(1) 脇田B 3号墳 (石室正面から)



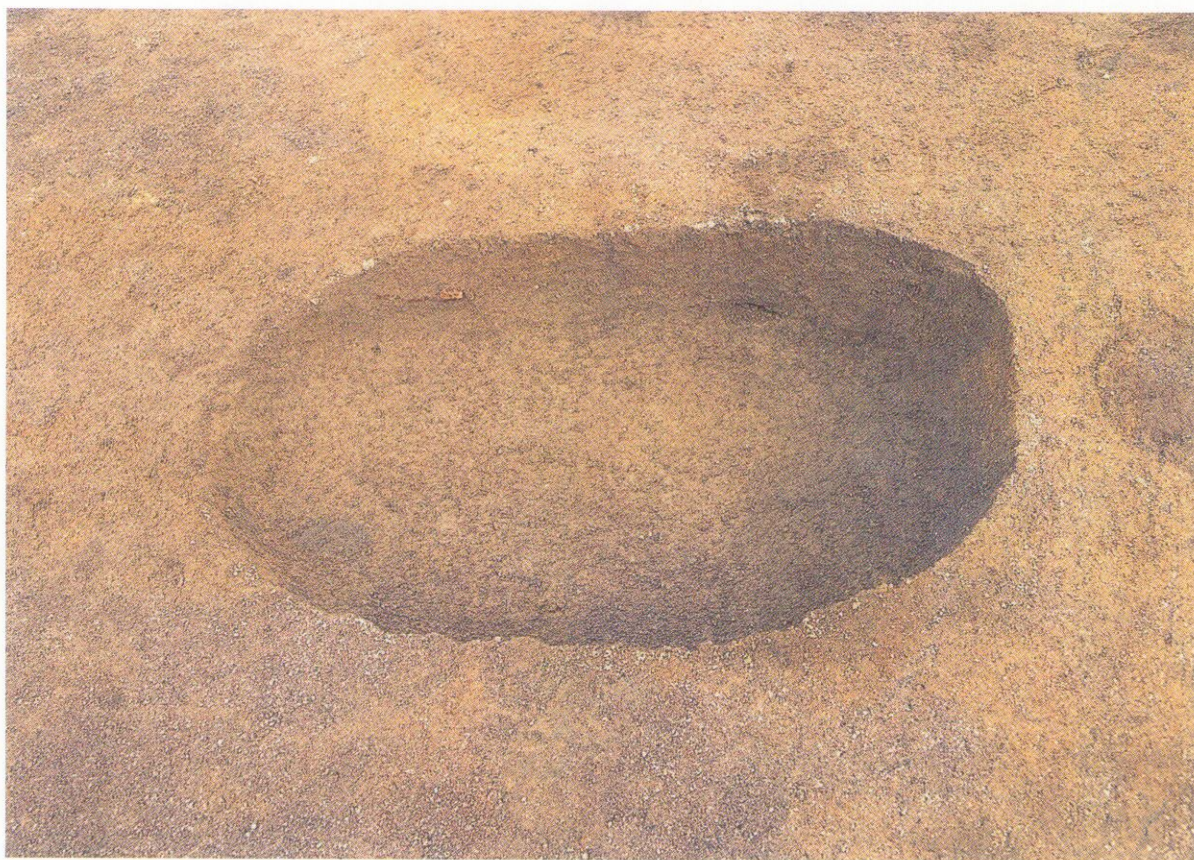
(2) 脇田B 3号墳 (左側壁後方から)



(1) 脇田B3号墳周溝断面 a-a'



(2) 脇田B3号墳周溝断面 b-b'



(1) ST001 (西から)



(2) ST004 (東から)



(1) ST006 (西から)



(2) SK005 (東から)



(1) SK005 (東から)



(2) SK014 (北から)



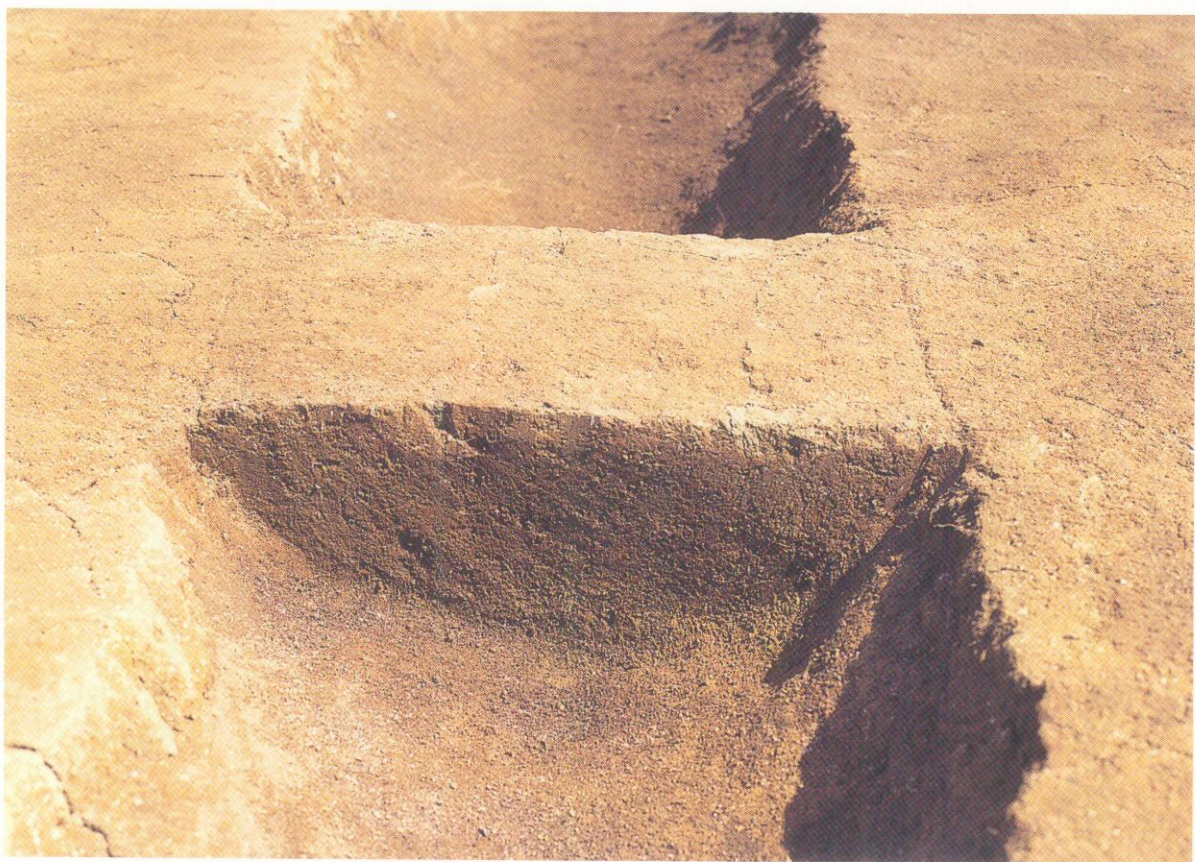
(2) SD011・012 全景 (東から)



(2) SD011 断面C-C'



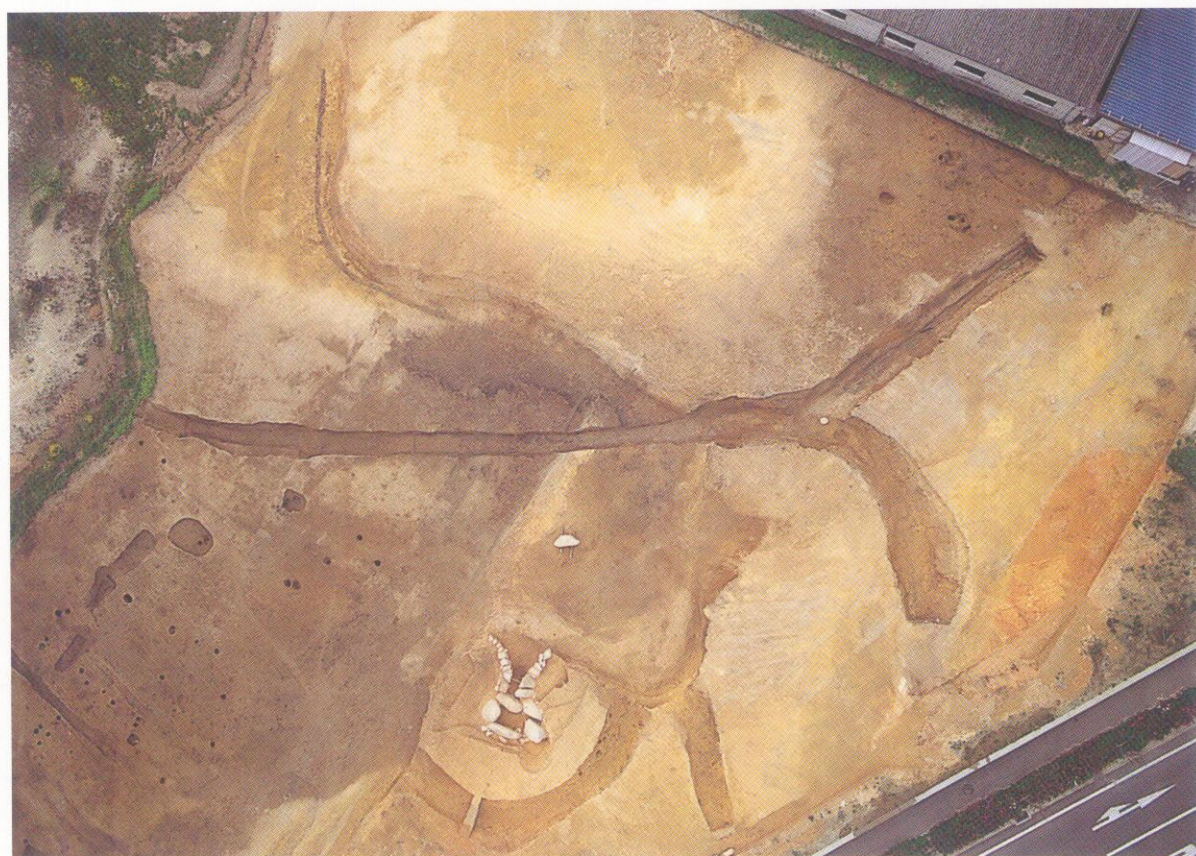
(1) SD011 断面D-D'



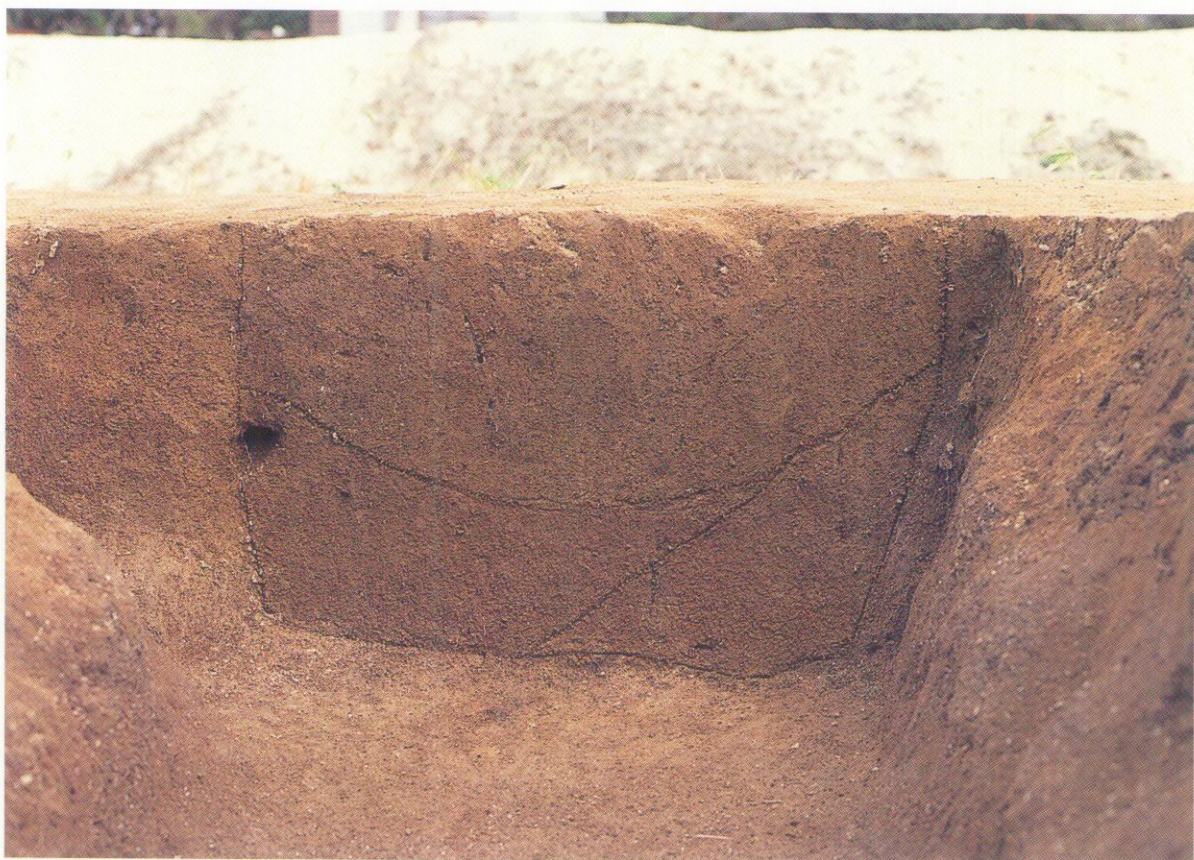
(2) SD012 断面E-E'



(1) SD012断面F-F'



(2) SD017全景(上空から)



(1) SD 017 断面G—G'



(2) SD 017 断面H'—H



(1) SD017断面I'-I



(2) SD017断面J-J'



(1) SD017断面K-K'



(2) SD017断面L-L'



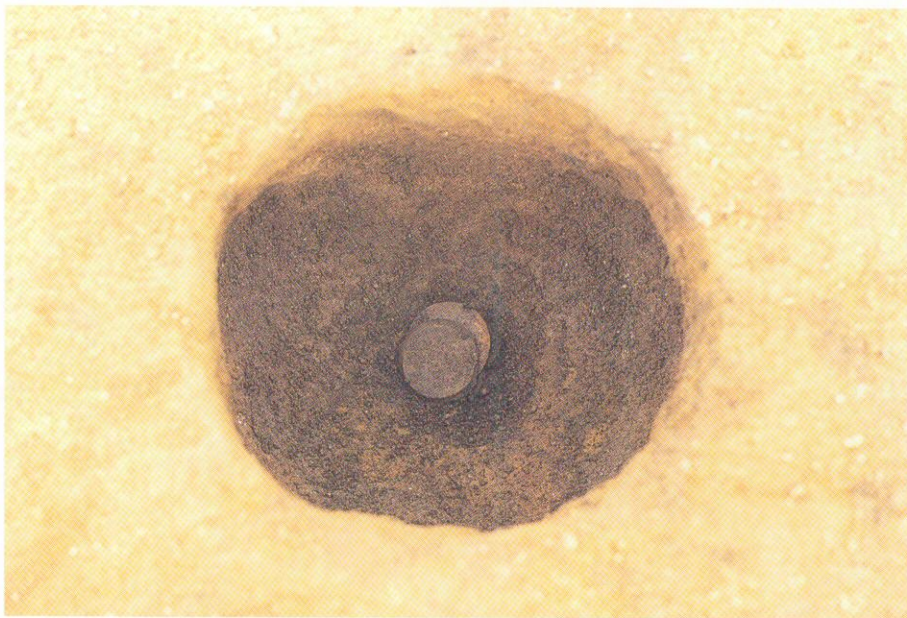
(1) SD021断面M-M'



(2) SD021断面N-N'



(3) SX022 (南から)



(1) P 0 8 5 (南から)



(2) 子持ち勾玉出土状態



(3) 子持ち勾玉 (108)



1 ~ 4



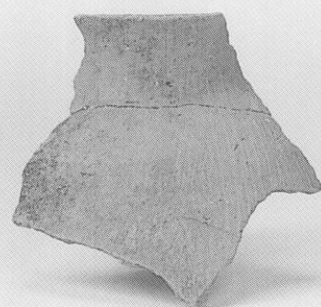
5



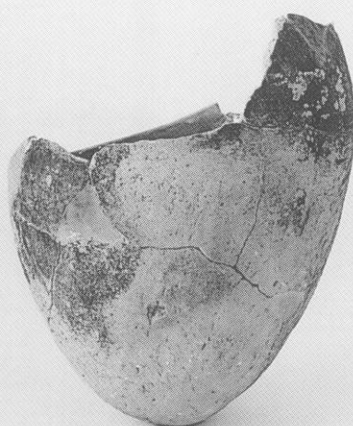
6



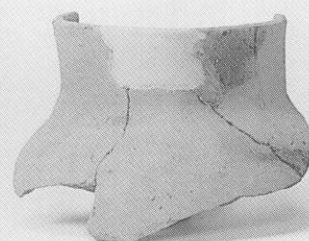
10



13



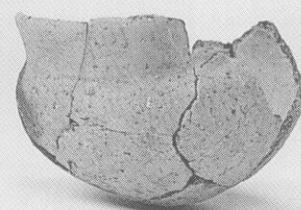
11



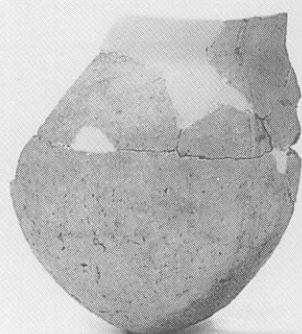
14



8



15



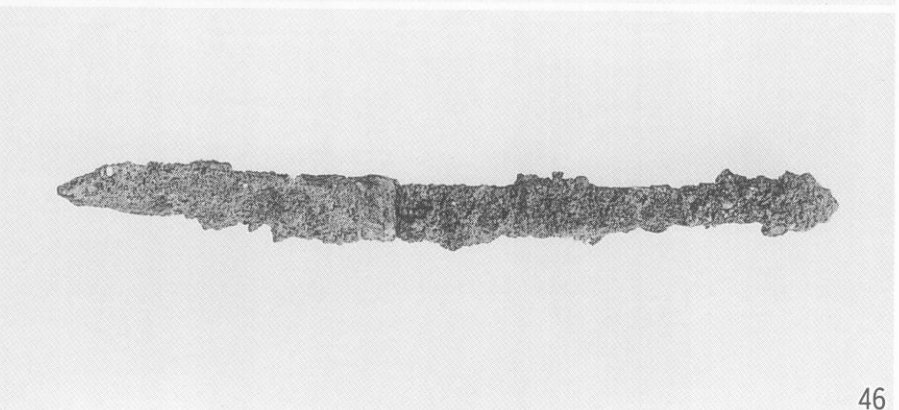
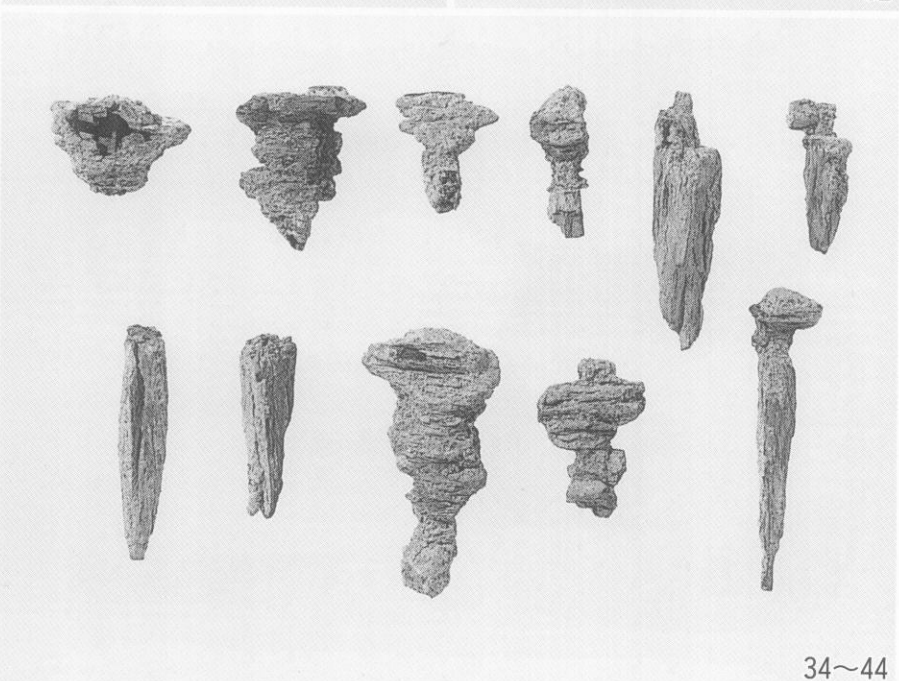
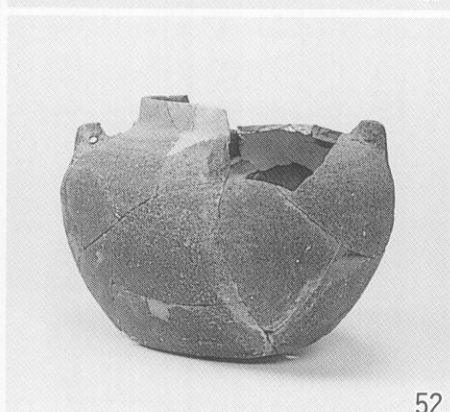
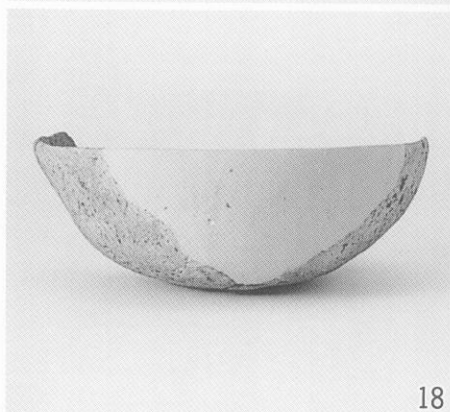
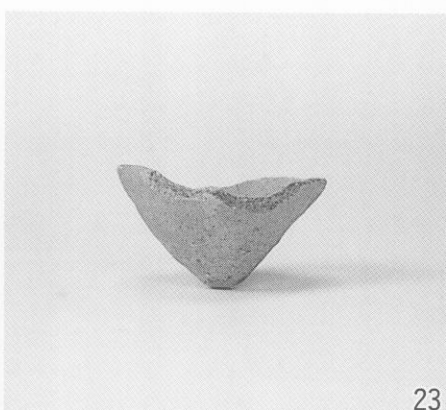
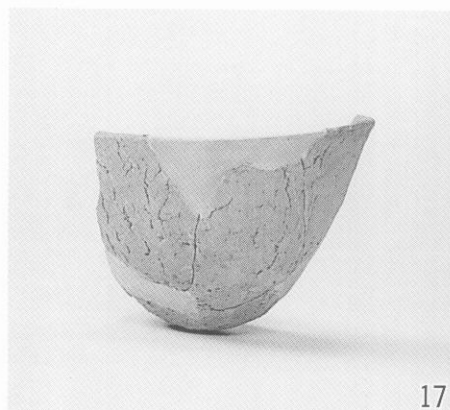
9



12



16

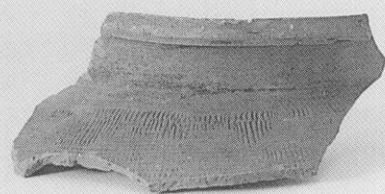




53



63



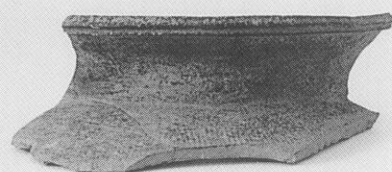
71



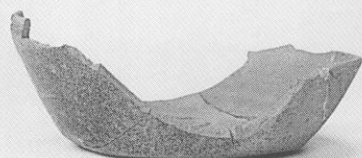
55



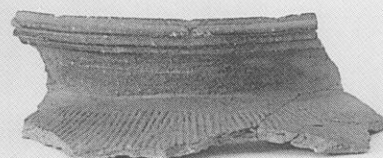
66



72



58



73



59



68



74



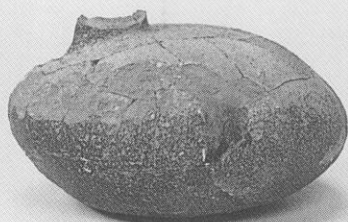
60



69



75



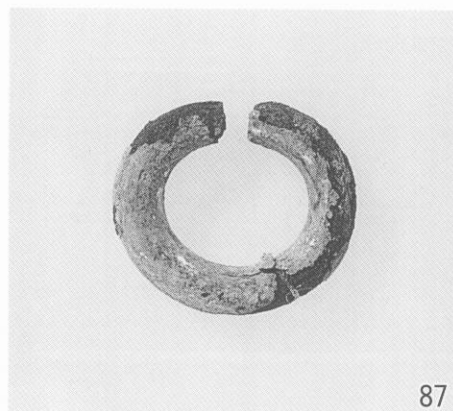
61



70



76



87



94(表)



94(裏)



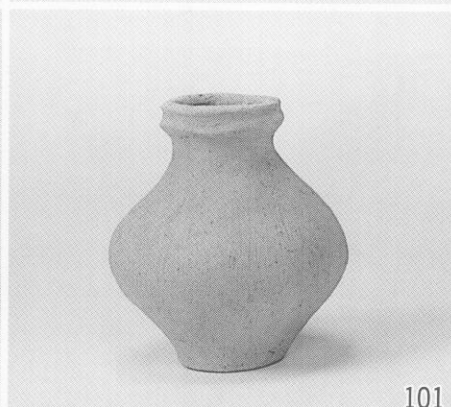
90



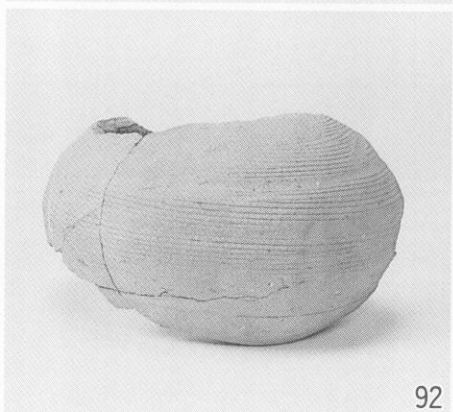
91



96



101



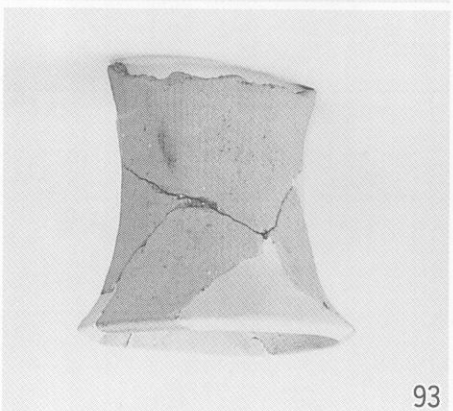
92



98



106



93



100



107

報告書抄録

フリガナ	ダザイフジョウボウアトダイ165ジハックツチョウサ								
書名	大宰府条坊跡第165次発掘調査								
副書名									
巻次									
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第64集								
編集者名	奥村俊久								
編集機関	筑紫野市教育委員会								
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1-1 TEL 092 (923) 1111(代)								
発行年月日	平成13年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
			市町村	遺跡 番号					
だざいふあと 大宰府跡	ふくおかけん 福岡県 ちくしのし 筑紫野市 とうのはる 塔原		402176	210044	33° 00' 02"	130° 59' 58"	950323 { 950526 980111 { 980117	7,100	店舗 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
大宰府条坊跡	住居跡 古墳 墓地	弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴式住居跡		弥生式土器 須恵器 土師器 子持ち勾玉 鉄釘				

大宰府条坊跡

第 165 次 発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 64 集

平成13年 3 月31日

発行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会

〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1-1

T E L 092-923-1111(代)

F A X 092-923-9644

印刷 大 同 印 刷 株 式 会 社

〒840-0815 佐賀市天神1丁目1-32

T E L 0952-24-8450(代)

F A X 0952-28-5583

URL <http://www.daidou-jp.com/>

